

げんこつ団

# 『 800～1200度のカタルシス 』

2025年10月29日(水)～11月2日(日)

火葬場の乱立した町

何も書いたことのないベテラン作家

人口推移の滝の上で母を亡くした彼女は

物語なしにカタルシスを得られるのか？

五人に一人が後期高齢者となった今年にお送りする

カタルシスクライシスナンセンス喜劇

## 800～1200度

遺骨の形状を保ち、有害物質の発生を抑えるのに適した火葬炉の温度

脚本：一十口 裏

△登場人物▽

土堀知里（つちぼりちり） 五十才女  
大塚郁美（おおつかいくみ） 五十才女  
白土葉伊里（しらとはいり） 二十五才女  
山路 五十才男  
岡部・坂上 五十才男・五十才・女  
坂上・岡部 五十才女・五十才・男  
佐藤 七十三才男  
田中 七十三才女  
老婦人 七十三才女  
かけら（小谷） 二十五才男  
父（三十五才） 祖母（六十才） 店員（二十五才）  
奥さん（五十才） 編集者（七十代） 審判（四十代）  
住民男性（三十代） 住民女性（三十代）  
社員1（二十代） 社員2（二十代）  
社員3（部長・三十代） 社員4（副部長・三十代）  
社員5（支部長・六十代） 社員6（副支部長・六十代）  
客0（?才） 客1（七十代） 客2（二十代）  
客3（脳内） 客4（脳内） 客5（脳内）  
客6（腸内） 客7（腸内） 客8（腸内） 客9（腸内）  
客10（虚構） 客11（虚構） 客12（食材）  
女1 女2 女3 女4 山路2 山路3  
郵便局員1、2、3（三十代）

△キャスト&配役▽

植木早苗 大塚郁美 父 社員1 客6 客10

社員5 郵便局員1

春原久子 土堀知里 客0 客8 客11

河野美菜 坂上・岡部 老婦人 客3 郵便局員3

丹野薫 山路 奥さん 祖母 客5 郵便局員2

三明真実 佐藤 編集者 住民男性 審判

客2 客4 社員4 女1

白宮綺桜 白土葉伊里 社員2 客1 客12 店員 女3

生江美香穂 岡部・坂上 かけら 社員6 客9 女2

清水さと 田中 住民女性 社員3 客7 女4

△スタッフ▽

演出・映像・音響 一十口裏

演出・振付 植木早苗

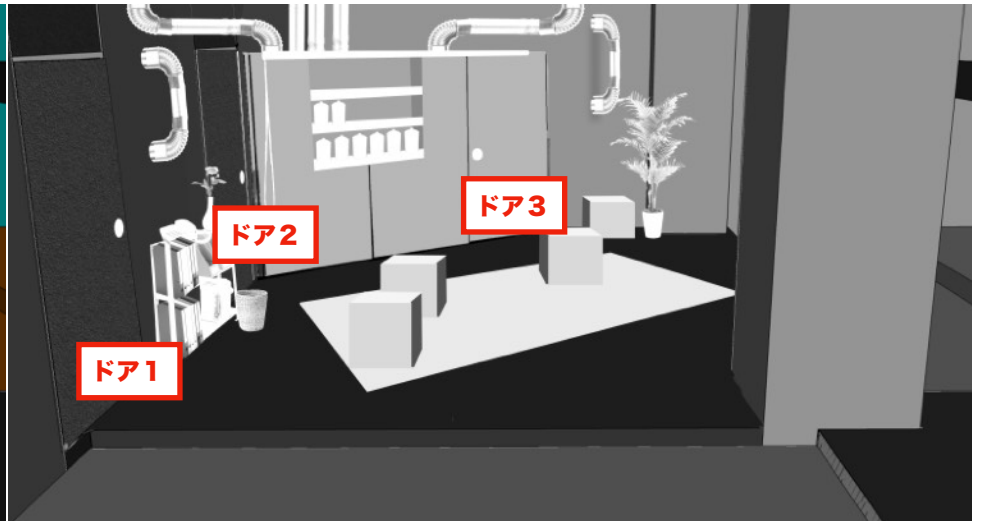
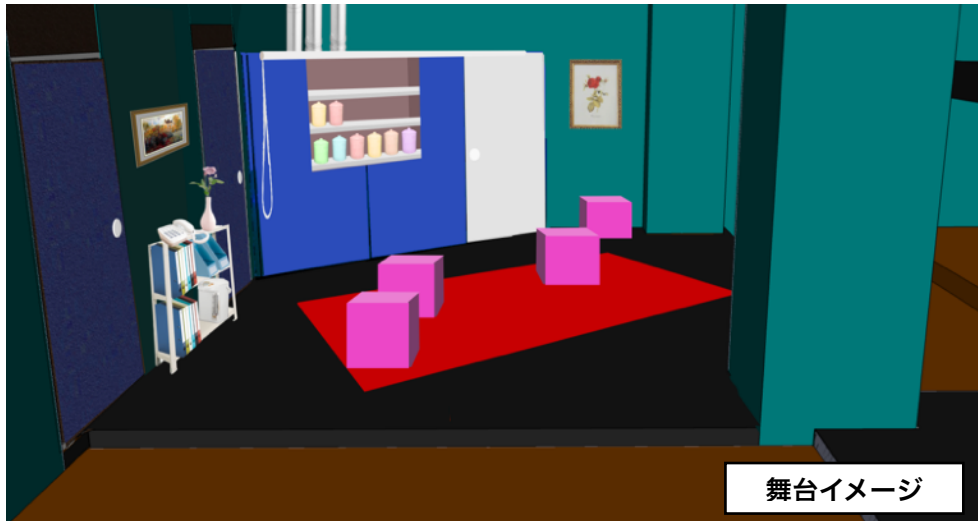
照明 山岡茉友子 舞台装置 島山英樹

音響オペ 吉田有花 映像オペ 信広天音

協力 (有)プログレスアイエヌジー 涙目キューピー 島山工務店

制作 げんこつ団事務所

●目次ページ



滝壺区飛泉町の火葬場。そこは繁忙を極めている。  
フル稼働する昔ながらの火葬炉はガタがきており、その労働環境は需要の増加に対応出来ておらず劣悪。  
業務員たちはいつ過労死や事故死してもおかしくない状況。或いは既に死んでいる。  
だがそうしたことはとりあえず、観客に知られなくて良い。  
まずはそこにやむを得ず足を運ぶこととなった女が、やって来る。

## 入社

開演時刻で客電のついたまま、電話が鳴る。

しばし電話がなつて、葉伊里、ドア1からやって来る。

葉伊里はカジュアルな服装。郁美と山路は黒スーツに黒ネクタイ。

葉伊里 失礼します（そして棚上の電話を見る）……。 （下手側のお客様に）あの、電話、鳴ってます。（上手側のお客様に）電話です、鳴ってますけど。…え、いいんですか？取らなくて。（両客席に）ねえ、誰も取らないんですかー？！

郁美 なんですかあなた、（ドア2から）

葉伊里 あつ電話です、

郁美 大塚です。

葉伊里 …。鳴ってます、

郁美 はいよく鳴っていらつしやつて。

葉伊里 いえあの、

山路 ねえ大塚さんちよつとこれ見てよ、（ドア2から）

葉伊里 あつ電話です、

山路 ああ山路です。

葉伊里 いえあの、

山路 この名簿の数字さ、ズレてないかな。

郁美 え？どれですか？

葉伊里 （お客様に）あの、とりあえず出てください切れちゃいます。取るだけでいいんで、お願いします、とりあえず立って、はい、

郁美 （お客様に）ああいんですよ、電話は無視していただいて。

山路 （お客様に）ええお座りになってください、電話は無視です無視。

葉伊里 そんな…私も何度もかけたんですよ？！

山路 ほらここところが、

郁美 どこですか。

葉伊里 あの、聞いてますか？ちよつと！（となんとか二人の視界に入ろうとする）

山路・郁美 （それを巧みに交わして無視を続ける）

そうしていると知里、ドア1からやって来る。無言で受話器を取り全員がそちらを見て、少し間。  
知里は洒落たスーツにハンドバッグ。受話器を戻して言う。

知里 一向にご連絡がつかないので参りました。急いでるんです。

葉伊里 先生、

山路 あ、あなた電話じゃなかったのか、

郁美 申し訳ありません、ただいま立て込んでおりまして、

知里 葬儀は家族葬で、出来るだけ早くお願いします。(と箱椅子へ向かう)

郁美 ああ、こちらでは火葬と少人数の直葬のみをおこなって頂けますが、

知里 それで構いません、親族ももう私しか居りませんので(と箱椅子に座り)これ死亡診断書。亡くなったのは私の母です。長いこと心臓を患ってはいたんですが安定していたんですよ。でも突然の発作で。

郁美 それはご愁傷様です、

知里 なのにごども駄目なんです、予約がいつばいで何も出来ないって。

郁美 ええそうなんです、今はどこの葬儀場も斎場も順番待ちの方が沢山いらつしゃって。特にうちのような火葬場も数が限られておりますので…(電話が鳴ると同時にすぐさま電話を切る)

葉伊里 あ。

知里 だから直葬で結構です。ほんとはもつとちゃんとしたいんですけど、仕方ありません。

山路 いやしかしこちらでもご予約のお客様がね、ほら、もうこれだけお待ちになってますので(両客席を指す)

葉伊里 え、そうなんですか…?

郁美 はい差し当たってどなたのご予見のない方も、とりあえず先にご予約だけとはいう感じですから。

山路 (お客様に)あ、こちらキャンセル不可なので順番が来た際には…まあどなたかを何かかんかして頂いて。

郁美 あと他にもこれだけご予約が入ってますので。(と棚の分厚い帳簿の束を指し示す)

知里・葉伊里 ……。

郁美 なのですすぐのご対応も新規のご予約も今は出来ない状況でございます。(と言いつつ電話線を引っこ抜く)

山路 誠に、申し訳ございません。(頭を下げる)

郁美 (頭を下げる)

葉伊里 先生…、

運転ベルが鳴り、ゴンゴンと低く唸る機械音が聞こえ始めて、奥の火葬炉の灯りが変わる。

ドア2から岡部と坂上、やって来る。黒スーツに白い手袋。

岡部 お疲れ様です。(とドア3に向かう)

坂上 あ、そちらは？(と書類を捲る)

山路 いやもうお帰りになるところで。(知里らに)さ、申し訳ありませんが、(とドア1に二人を促す)

岡部 小谷さん交代します。(とドア3へ入っていく)

知里 いえ帰りませんから、(客席に)ねえあなた。順番が変わって、いいでしょ？それかあなた、

知里 同じなんですよ。(音楽イン)それぞれのご状況は違っても、その時には滞りなく最後のお見送りをと。

郁美 皆さまそのお気持ちは、同じなんです…。(オペラの歌声が聞こえて来る)

知里 それははい、まあ、わかりますけど…、(歌声を気にしながら)

坂上 ああよくあることなんです。燃焼の際にご遺体の声帯からお声が。

知里 (音変わり落語の音が聞こえてくる)…え。芝浜？(続いて大勢の笑い声)え…これ全部が…?

郁美 はいそうです、混み合っているんです。なので私共も二十四時間体制フル稼働で火葬を。でないとも間に合いませんので。

岡部 (骨壺を2つ持ちドア3から戻り)山路さん、こっちお願い。

山路 はいはい。(ドア3へ)

岡部 (坂上に)えーつとこちらがアトウ様とイトウ様のご遺骨で、

坂上 (書類を捲って確認しつつ)はい。

郁美 このように火葬後直ちに美しい骨壺にお納めして、

山路 (ドア3から骨壺を3つ抱えて戻り)ねえ岡部さん坂上さん、小谷くんどうしたの。

坂上 あれ？居ないんですか？

山路 この忙しいのにどこ行っちゃったんだもう。

岡部 (山路の抱える骨壺を指し) で、そちらがウトウ様とエトウ様のです。

坂上 (書類を見て) じゃそれ、どなたなんですか? (と山路の抱えた骨壺を指す)

山路 あ。(とその骨壺を開けて) 小谷くんだ…。

岡部 え。(骨壺を覗き) あ、ほんとだ。

坂上 (書類に何か書き込む)

山路 (骨壺の中に向かって) 小谷くん、あんた何やってんのー。

葉伊里 え、どうしたんですか? それが何か、

郁美 ああ気にしないでください。担当の者がちよつとへまを、

坂上 (山路の抱えてきた骨壺を一つ開けており) あれ、こちらエトウ様じゃないですね。

郁美 このように大変立て込んでおりますので、

坂上 これ、山路さんです。

全員 ……。

わたし??

坂上 はい間違いありません。

山路 でもわたしここにいますよ??

坂上 (その骨壺の中に) 山路さーん。

岡部 あ、気にしないでください。こちらの者がちよつとへまを、

山路 え? わたしが?? (骨壺を奪う)

坂上 (書類に何か書き込む)

山路 (骨壺を覗き込み) ああわたしだ。

郁美 このように大変立て込んでおりますのでどうか (と別の骨壺を開けて) ああほらくそつ! へまやった!

岡部 えー何やってんの大塚さん。(とその骨壺を奪って箸を突っ込み) ああほらこれ、大塚さんの喉仏です。

葉伊里 ああ、(思わずよく見る)

岡部 で、こちらは大塚さんの肩ジーザスで、こちらが膝アッラーになります。

坂上 (書類に何か書き込む)

郁美 ね? このように非常に、立て込んでいますよ。

葉伊里 あ、はい、すみません、

山路 なのですか、お引き取りを。(頭を下げる)

郁美 (頭を下げる)

機械音が聞こえる。呆然としている知里。岡部と坂上は骨壺を後ろの柵に並べていく。

知里 ……でもじゃあどうすればいいんです?

知里以外 (知里を見る)

知里 本当に突然のことだったんですよ、何の準備も、心構えのようなものも全然、

郁美 お気持ちはよくわかります。

知里 え、どんな? 今私どんな気持ちですか? ねえどんな気持ちなんですか?

郁美 さあ、

知里 私まだ、ちつとも悲しめてないんですよ? こんなに悲しみたいのに、

郁美 申し訳ございません、

知里 ほら涙の一つも出ないんです。たった一人の家族なのに、何より大事な母なのに…、

山路 大丈夫です。悲しもう悲しもうと思ってる時ほど、人は悲しめないものですから。

知里 え？

山路 今はショックで心が麻痺してしまっているんですよ。しかしやがて、とうに忘れてしまった頃のことふいにね、本当の悲しみが訪れますから。

知里 は？何を言ってるんですか。それなりの段取りを踏ませて頂ければそれだけでいいんです、それだけで私、チャーッと悲しめますから、ええもう今すぐにでも。なのにこのままじゃ…、

葉伊里 先生、

知里 ああ母さん、

葉伊里 先生、

知里 私も母さんのところへ…、（とドアへ）

葉伊里 （それを止めて）ねえどうにかしてください、このままじゃ後を追いかねません、

岡部 大丈夫です。死のう死のうと思っている時ほど、人は死ねないものですから。

葉伊里 え？

岡部 危ないのは死のうなんて全く思っていない時です。そんなこと微塵もまるで思っていない（唐突に死ぬ）

葉伊里 えっ、

坂上 ね？全く思ってもみなかったことで（唐突に心臓発作）

葉伊里 なに？

山路 ほら。そういったものなんですよ。

郁美 （岡部と坂上を素早くドア3へ片していく）

山路 ……恐らく、お母様も。（そしてドア3へ）

知里 ……………。（箱椅子に座る）

長めの間。機械音が聞こえる。火葬炉が赤く灯る。

葉伊里 （火葬炉を見たまま）…え、いいんですか？こんな簡単に…、

郁美 （火葬炉を見たまま）ああいいんですよ我々世代は。いくらでも替えが居ますから。

葉伊里 え？

郁美 もう履いて捨てるほど居るんです。だから多少減った方がいいんですよ。（箱椅子に座る）

葉伊里 ……？

郁美 その同天小学校、ご存知ですか？

葉伊里 あ、はい。私も、先生も地元ですからそこに…、

郁美 我々もそこだったんですがね、我々の頃は一クラスは五十人以上、クラスの数は一十八クラスもあって、

葉伊里 ああそうだったようですね、

郁美 学年も、一年、一、0000一年、一、0000二年、一、0000三年、一、0000四年と、

葉伊里 え、どういうことですか…？

郁美 だからもう誰が誰やらわからないくらい、もう本当に、腐るほど居るんです。

山路 なので我々世代はね、ちよつと減った方がいいんですよ。むしろ減るべきなんです。（とドア3から戻って来る）

山路2 ええ。でないと我々の老いた三、四十年後にもまたね…、（※岡部役から山路2となって戻って来る）

山路3 はい。このような状況になってしまいますから…。（※坂上役から山路3となって戻って来る）

山路4 （それぞれに同意の言葉を掛け合う）

葉伊里 あ、いえ、増えてます、増えちゃってますから…ねえ…、

知里 では私が減ります。（立ち上がる）

葉伊里 あ、

知里 私が減りましょう。(とドア3へ向かっていく)

葉伊里 先生待つて。(そして郁美に)お願いです。早くお母様を、

郁美 そうおっしやられても順番がありますので。

葉伊里 でもだつて今ほら、(火葬炉を指し)

山路 ああ、あれは業務の合間にちゃちゃつとこう、

郁美 ええ、間にあわせにささつと済ませる、まかないみたいなものです。

知里 (郁美を見る)

葉伊里 先生、私ここで働きます。

知里 は？

葉伊里 だつて早く火を通さないと、

郁美 いえでもまかないは業務員本人か、せめてご親族でないと、

知里 まかないつて言うな…(郁美の襟ぐりに掴みかかる)

葉伊里 じゃあ先生も。

知里 え？

葉伊里 先生もここで働きましょう。

知里 何？

葉伊里 もうそれしかないんです。お願いします。(火葬炉が光る)

山路 2・3(火葬炉を見る。機械音大きくなる)

山路 いやでもそれではお弔いが出来ませんので、

知里 それは駄目。ちゃんと弔わないと。ねえ弔いたいの、弔わせて、弔つてよ、ねえ、

郁美 ではこの方々の後ろにお並びください。(と客席を指すと客電が少し灯り)そうしましたら何ヶ月か何年後

かには。

葉伊里 先生。この際仕方ありません。(と箱椅子に座り)お願いします。先生の名前は土堀知里。私は白土葉伊里

です。先生は小説家です。ですがいいんです。こちらで働かせてください。

山路 あはい…(と箱椅子に座つて)ではこちらに記入を。

知里 いや、こんなの……。

突発的な破裂音。そして厳かに音楽イン。部屋全体が赤くなつていく。

知里以外 ……………？

郁美 なに……？

知里 私はちゃんと、悲しみたいのー！ー！ー！！！！

と、知里が叫ぶと火葬炉が爆発。全員が爆風に飛ばされる。暗転。

音楽はそのまま、映像へ。

## Film OPENING

タイトル。2025年げんこつ団『800～1200度のカタルシス』

日本の人口推移グラフ。棒グラフが膨れ上がっている団塊世代、団塊ジュニア世代。その棒が揚々と伸縮する。

(噴煙のあがっている爆発現場。)

ニュース声 「先程、滝壺区飛泉町の火葬場が爆発した模様です。繰り返します。

先程、滝壺区飛泉町の火葬場が爆発した模様です。

現在、消防が消火活動にあたっていますが、建物内で業務中だったと見られる業務員4名が行方不明。また人数は定かではありませんが、順番待ちの来客者も多く居合わせていたと見られ、その来客者全員の行方も、分からない状態だということです。」

黒スーツと黒ネクタイの社員たち一列に並んで、移動したり回つたりのイメージ映像。

(神田辺りにあるビルに「汎愛社」の看板)

ニュース声 「爆発事故を起こした汎愛社は、事故を起こした火葬炉と同機種の火葬炉を全て撤去。そして需要の急増を受けて、新たな火葬場を建築を、急ピッチで始めています。」

住宅街のあちこちに赤い建物が、コンビニの様に建ち並んでいく様子。

その建物には「Hottest Station KASO」の看板と炎のマーク。

ニュース声 「この火葬場の火葬炉は全て、建物の裏手で病院や病院併設の介護ホームとベルトコンベアで直結。

フルオートメーション、フル稼働で、火葬が行えるということです。」

(建物の裏手でベルトコンベアで運び入れられる沢山の棺桶。ベルトコンベアで運ばれ出ていく沢山の骨壺。)

ニュース声 「また申し込みについても、非常に利用しやすくなりました。」

社員らの黒スーツに色がつき、映像は明るくカラフルになっていく。

「Hottest Station KASO」CM、華やかに始まる。

CM声 「フルオートメーションで素早く火葬。自動で美しい骨壺に収骨。」

(色とりどりの火葬炉が稼働し、骨壺が運ばれていく、カラフルなコラージュ。)

CM声 「お申し込みはアプリで簡単。お預かりからお届けまで、専用パックでラクラク配送。

あなたの近くのホットテストステーション。店舗だけでなく駅前や街角でも、お受け取りできます。」

(アプリの画面。棺桶配送の様子と、骨壺の駅や街角の受取ロッカー。受け取りの画像。)

CM声 「フルオートメーション、フル稼働。日本中滞りなく、お悔やみ申し上げます!」

(「Hottest Station KASO」の店舗。ピンク色を基調にしたポップでキュートな店舗。)

## 開店

映像オフ同時に明転。映像音楽はそのまま、小さくなってBGMに。

「Hottest Station KASO」の制服、南米の花をあしらった華やかなピンクのシャツ着た佐藤、

ドア2からやって来て、ロールカーテンを上げる。柵に花柄のカーテンを設置する。

その最中に田中はドア1からやって来て言う。

田中 (ドア向こうに) はいさようございます、ええ。こちらで承っております。はい先週工事が終わりました、

こちらは今日から営業で。ええそうですねです。

佐藤 (柵から一つ骨壺を取って田中に渡す)

田中 (ドア向こうに) お待たせしました、こちらになります。はい。ご愁傷さまでしたー。

佐藤 …まあこんな簡単にねえ。酷い世の中になったもんだ。

田中 でも便利になっていいじゃないですか。

佐藤 この作りなんかも、いかにも急ごしらえのお粗末さで。いいのかな、こんなんで。  
田中 佐藤さんは確か、元大手ゼネコンの技術者でしたっけ。  
佐藤 ええほらあそこの橋も道路もね、頑丈なもんでしよう。あれもみんな私らがね、

ドア外でドーンと破壊音がする。(音楽はオフ)

外の声 わああ橋が落ちたー！道路が割れたー！（そして悲鳴。男女の阿鼻叫喚）

佐藤 あー…しかし今じゃあその維持さえも、ね？まともに出来ない有様だ。

田中 大丈夫ですかね、とりあえず通報を、（と電話に手を伸ばすが）あら電話線が切れてる、なんだ。まったくしょうがない。

田中 余程急いで工事なさったんですね、（と線を繋ごうとし）ああどうしましょう、

佐藤 こんなあれじゃあきつと、死んでもまるで、死んだ気がしないよ。

田中 またそんな、

社員1 お疲れさま。問題なくやってる？（ドア1からやって来る。破れたスーツ姿でシャツは血まみれ）

田中 あ、

社員1 いや本社から差し入れ持ってきたんだけどさ、今そこ崩落した時に木っ端微塵になっちゃって。ごめんねー。（そして普通に立っていられずグニャグニャする）

田中 あああ、もしかして…、

社員1 ん？

田中 ああほら瞳孔、開いてません？

社員1 えっ？

田中 ああほら完全に。

社員1 （急にお腹が痛くなったように）ああ…、じゃあごめん、ちよつといいかな？（とドア3を指す）

田中 え？

社員1 今誰も入ってない？使用中じゃない？（ドア3をノックする）

田中 はい…どなたも入っていませんけど…、

社員1 （お腹を抑えながらドア3に向かい）あーじゃちよつと行ってくるわ。あ、紙ある？

佐藤 紙？

社員1 ああ要らないか。（とズボンを脱いでドア3に入ろうとする）

田中 え、あの、火葬？ですよね？…あのちよつと、

そこで美しい音。開いたままのドア1に光が灯り、客0、釈迦（インド風）が現れる。

そして涅槃の体勢（右腹を下に）で、ゆつくりと床に寝そべる。

佐藤 …あ。いらつしやいませ…？

三人 ……………。

社員1 あーあれだ、今ほらなんか、空から美しい音楽や芳しい香りが降り注いだじゃない。あつちの方で。

佐藤 え？そうでした…？

社員1 ほら弟子みたいな坊さんや色んな動物とかも、なんか急に沢山集まって。あそこら辺に。

佐藤 そうでしたか…？

社員1 入滅ですね。

田中 え？あの辺で？あの辺にいらしてたんですか？

佐藤 じゃあこちらで茶毘に？

社員1 あーそしたら今から五十六億七千万年後に、弥勒菩薩が衆生を救済しに来るのかー。凄いなー。  
佐藤・田中 ……。(客0を見る)  
社員1 じゃ俺はいいから、先にご案内して。(そしてズボンを履き、スーツの上着をちゃんと着直す)  
佐藤 でも、  
社員1 ああ弟子とかはみんな修行と布教の旅に出ちゃったんでしょう。ほら諸行は滅びゆく、怠らず努めよだとか  
何とか言われちゃってさ。  
佐藤 ああ、  
社員1 だからご本人に。(棚から紙を一枚とって)  
佐藤 あはい、(受け取って)  
客0 (半眼のまま佐藤らを見る)  
田中 あの…、お申し込みはお済みでしょ(うか) ああつなんていい香り…、  
佐藤 まずはこちらの用紙に必要事項を…ああダメです、何故だか勝手に、涙が溢れ出てきて…、  
社員1 ああじゃあこれはいいからほら、キャンペーンのご案内して。(とその用紙を奪って)  
佐藤 えっ、  
社員1 決まりだから。  
佐藤 あ、はい、  
田中 (ポケットからスマホを出して客0に) 只今開店キャンペーン中として、こちらのアプリが無料でお使い頂けるのですが…、  
佐藤 (客0に) こちら読経・戒名・焼香アプリでございましてその…一部課金になりますがこちらの可愛い小坊主ちやまが有難い読経と戒名を…、  
田中 (号泣しながら) あああ無理です、こんな世俗的なもの。なんでこれ水着みたいな…、  
佐藤 (号泣しながら) ええ、こんなに低俗で煩惱に塗れたものをお勧めなんて、とてもとても…、  
社員1 ああいいよう。(とスマホを奪って客0に) ですね、今なら阿修羅ちゃんのドキドキ六道ルーレットが、なんと無料で回せるんですよ。(とスマホをタップすると「回しちゃうよ?」の音声)  
客0 (半眼だった目を大きく見開く)  
佐藤・田中 (ひいとなる)  
社員1 天上・人間・修羅・畜生と、餓鬼・地獄の六道をこうしてクルクルッと。(ピロピロ音)  
田中 あああつごめんさい、私ちよつと…、  
佐藤 私もすみません、今日付でここは…、  
客0 (ゆっくりと上半身を起こし始める)  
田中 ああ失礼します…!(佐藤と共にドアへ逃げ去っていく)  
社員1 これが今なら解脱(げだつ)が出るまで何度でも、幾度の生涯をかけて何度でも…あつ…(当たりの音)  
客0 ……………。(光に包まれる)  
社員1 アーヤヴィジュニャーナ。  
客0 ヴィジュニャプティマートラ。  
社員1 我執(がしゅう)、末那識(まなしき)、  
客0 阿頼耶識(あらやしき)。  
社員2 (ドアから) あーやつと着いた、先輩大丈夫でした?

客0、立ち上がると社員1に手を差し伸べる。社員1、その手を取って、共に天上へ登っていく。  
(ちなみに客0と社員1の唱えたのは「唯識論」の識。唯識論とは全ての存在は認識によつて成り立っているという大乘仏教の思想の一つで、無意識の根源、阿頼耶識で全ては繋がっていることを示唆するが、そうしたことはとりあえず、全く気にしなくて良い。)

社員2 あ、ちょっとどこへ、先輩、先輩、  
社員1 ああそうだ。バイトさんたちさつき辞めちゃったから、とりあえずここ見といて。よろしく。  
社員2 え？

そして客0に導かれて社員1、ドア1へ、天上に昇るように吸い込まれていく。

社員2 ちょっと待ってください、どうということですかー！

## 業務員

ドア1と2は自動的に閉まり、「Hottest Station KASO」の制服を着た山路、書類を見たままだらからやって来る。社員2がそれに気づき、しばしあつてから。

山路 ねえこの名簿の数字さ、やつぱりズレてるみたいだからデータのチェックを…、あれ？

社員2 …え？

山路 佐藤さんと田中さんは？

社員2 あ、バイトさんたちなら、なんか辞めちゃったみたいですけど…、

山路 まじかなんだよ、バックレ？

社員2 いえあの…山路さん、ですよね？

山路 うん？

社員2 でも山路さん、ここの爆発事故で…、

山路 なに。

社員2 無事だったんですか？

山路 ああ無事じゃないよ、重体だ。

社員2 え？

山路 自意識不明の重体だ。

社員2 …意識不明？

山路 自意識不明。（そして後ろの柵の骨壺を一つ取って）ねえ大塚さんやつぱりあの名簿さ、

社員2 （遮って）え、ちょっと何してんですか？

山路 うん？

社員2 大塚さん？

山路 うん大塚さん。あと坂上さんに岡部さん。（と別の骨壺を指す）

社員2 …？

山路 あとこれわたしね。（と別の骨壺を指す）

社員2 ん？じゃやつぱり山路さん…、

山路 いやみんなちよつとあれしただけで。でもちゃんとして働いてるから。だから安心して。大丈夫。え…？

山路 ほらここも新しくなったし、この制服もいい感じだし。これからはより一層、頑張るよ。安心して。

社員2 いやあの、火葬もフルオートメーションになりましたし、御遺骨の受け取りもここだけじゃなく駅とかでも出来るようになりましたんで…、

山路 うん。便利になったよねえ。（社員2の台詞中に柵から防災頭巾をとっており、社員2の頭に被せる）

社員2 だからあの…人員はそんなに要らないですよ…（と頭を触って）何ですかこれ。

山路 うん？（次に柵からダイナマイトの束をとって、自分に巻き付けていく）

社員2 だからその、ここもバイトさんだけで充分で……、何ですかそれ？  
山路 え？（巻き付けながら）  
岡部 （ドア2から）なんだ、いらしてたんですか。

岡部も山路と同じ制服を着ているが、目出し帽を被って手にはナイフと空の鞆。目出し帽で顔は隠れている。※配役は坂上と入れ替わり。

岡部 山路さん、名簿のチェック俺やるよん。

社員2 え、誰ですか、何ですかそれ、

岡部 ああさっきの道路の崩落、大丈夫でした？

社員2 ああ、

岡部 もうね、今の世の中いつ何があるか分かんないから。

山路 ね。まったく思ってみなかつたようなことが起きるんだから。

坂上 （ドア2から）あれ？どうしました？

坂上も山路と同じ制服を着ているが、ウエディングベールを被って手には花束。ベールで顔は隠れている。※配役は岡部と入れ替わり。

坂上 ああ岡部さん、過去データ残ってなかつたです。ちょうど山路さんが探してた部分が、

山路 えーそうなの？まいったな。

社員2 え、誰なんですか、何ですかそれ、

坂上 え？

社員2 ご結婚、されるんですか？

坂上 え？

社員2 （岡部に）犯罪を、…犯されるんですか？

岡部 （驚き）まさか！そんなことまったく思ってもみないことですよ！

坂上 （笑って）ええ私も結婚なんて微塵も考えてません。やだなんでそんなことを。

岡部 （笑って）はーびびくりしたなあ、何言ってるんですか。（そして坂上と笑い合うなど）

社員2 なんなんですか、

山路 ああ無意識だよ。

社員2 は？

山路 できっきの話、なんだっけ？ここの人員が何だとか。

社員2 は？

山路 ほら言つて。大事な話でしょう。

社員2 ああ、

山路 私たちもほら、先のことを考えてかなきゃいけないしき。（と無意識にポケットからライターを出し）

岡部 え？何の話です？教えてください。（と無意識にナイフを社員2に向け）

坂上 え？もしかして私たち、ここを辞めなきゃいけないの？（と無意識に社員2の手をとり）

岡部 あーそんな気はしてたんだけ。色々便利になったしねえ。（と無意識に社員2の鞆を奪い取り）

坂上 まあ仕方ないですよ。そういうことはあります。（と結婚指輪を社員2の指に嵌めようとしながら）

三人 （「仕方がないね」と口々に言いつつ、ダイナマイトに火をつけようとし、鞆を乱暴に物色し、指輪を無理やり嵌めようとする）

社員2 いいえすみません！一旦本社に戻ります！

山路 え、そうなの？なんで？  
社員2 いや、本社に持ち帰って報告しますので、（と鞆をとり荷物をまとめて）  
岡部 ああ！（とナイフを社員2に向け）お茶でも出せば良かったな、すみません気が利かなくて。  
社員2 それじゃ、  
坂上 あっ…、  
社員2 （立ち止まる）  
坂上 用心してくださいね。  
山路 うん。いつ何があるか、もう誰にも、見当がつかないからさ。  
社員2 ……ああはい、気をつけます、（と防災頭巾を深く被って。ドアへ去っていく）

### 休憩時間

岡部 いやあなんだか、社員さんは忙しいね。（目出し帽を額まで上げる）  
坂上 うんほんとにたいへんそう。（ボールを額まで捲る）  
山路 ああまったくだね。（と二人を見ると驚き）えっ、岡部さんと坂上さん……じゃないね。え？  
山路 だつてほら、ねえ。  
岡部 いやいや何言ってるんですか、岡部と坂上ですよ。（自分らを指さしつつ）  
坂上 ほら私たち焼却された後にあの爆発で、バラツバラになっちゃいましたけど。でもまたこうやって、ちゃんど元通り。（岡部に）ねー。  
岡部 なー。  
山路 ああ…そう。（笑顔の二人に）そうだったんだね。（と笑顔を返す）  
岡部 おう。（笑顔）  
そこにドア1から先ほどの佐藤がやって来る。警備員の制服を着て赤色灯を持っている。  
佐藤 失礼します。あ、申し訳ありません。先ほどの崩落事故の現場に今から重機が入りますので時折騒音が、あれ？佐藤さん？なにその格好。  
山路 ああお疲れさまです。（と警帽をとって）こちら先ほど辞めさせて頂きましたので、今は新しいバイトを。えっ、もう？  
田中 （ドア1から走り込んでくる）お待たせ致しましたー、すみません遅くなってしまいました。  
田中 田中はフードデリバリーの制服を着ており、ビニール袋を持っている。

岡部 ああいえ全然。今さっき頼んだところなんで、  
田中 枝豆弁当、塩辛弁当、たこわさ弁当、なめ茸弁当お持ちしましたー。  
佐藤 おつまみ？  
田中 （袋を放り投げ）じゃありがとうございましたー。（と急ぎ去ろうと）  
山路 あつちよつと待って。え、田中さん？あー…このバイトをやめて、今はそちらで…？  
田中 ああまあはい。  
佐藤 （笑いながら）もう気をつけてくださいよ。田中さんね、さっきそこでスピード違反で警察に止められたんですよ、  
田中 （笑いながら）いや法定速度をうっかり十キロほどオーバーしちゃってて。

坂上 ああ。  
いや徒歩でなんですけどね。  
坂上 え、  
じゃ失礼しますー。(と全速力で走り去っていく)  
佐藤 気をつけてくださいねー。ということでの辺工事入りますので少々御迷惑をお掛け致しますが。  
坂上 あはい。(重機車両の音が聞こえる)  
佐藤 (ドア外へ) 何やってんだ馬鹿野郎! あつちだよ!(とドアへ去っていく) オーライオーライ……!  
岡部 ……。んーやつばあの世代はこう、バイタリティが違うね。  
山路 ああうん。…じゃあれだ。お昼にしようか。(とダイナマイトを外して棚へ)

岡部と坂上も口々に同意しながら目出し帽とベールを外し、  
「誰がなめ茸?」等と言いつつ、弁当を箱椅子の上へ。  
そこにドア2から郁美と知里、山路らと同じ制服を着てやって来る。  
郁美は灯油缶を持ち、知里は消化器を持っている。

郁美 あーお腹減った、お昼来た? 休憩しよう、休憩。(と灯油缶から部屋じゅうに灯油を撒いていく)  
坂上 あ、ちよつと、(と鼻を抑える)  
岡部 (匂いに咳き込む)  
郁美 お昼休憩だけが憩いの時間だよねー。ああ美味しそう。(弁当の上にも撒く)  
山路 ああちよつとちよつと大塚さん、撒いてる撒いてる、  
郁美 え? なに。どうしたの。(と灯油缶を投げ捨てポケットからマッチを出す)  
知里 (素早く郁美の手に消火器を向けて構える)  
岡部 (郁美のマッチを奪う)  
坂上 (知里の消火器を奪う)  
山路 またもうやめてよ。  
郁美 (弁当を見て) あーっ、お弁当がーっ…、  
岡部 何やってんの。  
郁美 ああ無意識無意識。  
岡部 ああ…。  
坂上 しょうがない、また頼みますか、(とスマホを出す)  
山路 いややめて、また田中さん来ちゃうでしょう。(と坂上を制し) わたしが買いに行くよ。  
知里 いえ葉伊里に頼みます。あの子食べに出たので。(とスマホを出す)  
山路 ああそう?  
岡部 白土さんは時間きつちり休むね。(弁当を袋に戻しつつ)  
知里 良くも悪くも今どきの子ですから。(そして電話をかける)  
客1 すいませーん、受け取りお願いしますー。(ドア1から)  
郁美 ああはいはいこちらですねー。(と棚から骨壺を一つとって必要以上に遠くから客1に放り投げる)  
客1 ありがとございます。(と受け取って去っていく)  
知里 あーもしもし? これ聞いたらとつとと食べるのやめてテキトーな弁当四つ買ってきて。よろしく。  
坂上 あ、ひどい。(そしてドア2へ)  
山路 なに? 四つ?  
岡部 (弁当の袋を覗いて) ああ土堀さん、弁当頼まなかったんですか?  
知里 私は結構です。とつとと食べて仕事してください。

岡部 あ、はい…。

客2 すみません、これそこに落ちてたんですけど…。(ドア1からパンティを履いた尻を持つてくる)

郁美 ああはいはいありがとうございます。(と尻を確認すると、尻をドリブルし火葬炉内にシユートする)

山路・岡部・客2 うえーい。(とシユートに対して歓声)

郁美 ありがとうございますー。(と客2をドア外に追いやる)

坂上 で。山路さん。さっきの話、何だったんですか？(ドア2から雑巾をとって戻ってくる)

山路 え？ああ人員削減の話ね、いやそのまんま。もうここもこんなに人要らなくなったって。(箱椅子に座る)

郁美 えーやめてよ、せっかくこんな便利な感じになったんだから。

岡部 でもあれじゃん？バイトが居なくなったら大丈夫じゃない？(箱椅子に座る)

郁美 あ。あの二人やめちゃったんだ。へー。(と箱椅子に座ろうとするが上手く座れない)

岡部 …何してんですか、

郁美 あああの爆発で右足は過去にタイムスリップしちゃったし左腕は未来へ行っちゃったし。他は全部、別の世

界に飛んでったから。

山路 あーじゃあ大塚さんは…(考えて)大塚さんなんですか？

郁美 ああうんまあ。悪いね。みんなのあちこち、貰ったから。(箱椅子にやっと座れる)

山路 じゃ足りなくない？誰かのどつかが足りなくない？(と慌て自分の体を触るなど)

坂上 そこ拭くんで退いてください。

山路 あ、うん。

業務員らの諸々を怪訝な顔で見ていた知里を、山路、まじまじと観察する。

知里 (山路が見てくるので)私は死んではいないと思います。爆風は受けましたけどほら、無事だったんです。

山路 ああそうなの？

知里 あと一応言つときますけど、私と葉伊里も今日で辞めますから。

岡部 えっ、

知里 当然でしょう。この工事が終わった途端に、ささーつと、済ませてくださったじゃないですか、母の火葬。

そりやあもう、手際よく。いつの間にか。

岡部 ああまあ…。

知里 なのでもう用はありません。開店初日の今日を終えたら、二度とここへは来ません。

山路・岡部・坂上 (少しの間のと、噴き出すように笑う)

山路 ああ、

岡部 やっぱりね。

知里 なんですか。

山路 いやあみんな同じですよ。私も初日はね、泣くほど嫌で。

岡部 そうそう。初日だけでなく毎日毎日、吐いてはうなされて、何も食べられず一睡も出来なくなつて、

坂上 そうそう。ストレスでそのうち胃が腫れあがつて肺が破れて、視界がどんどん狭まっていつてね、

岡部 うん。そうしてもうすぐ三十年になるからね。

知里 あ…そうですか。でも今は慣れたんでしょう？

山路 いいえ全然。わたしなんか今、あなたの鼻しか見えてないから。

岡部 俺は鼻毛だけ。

山路 それでもやってかないとねえ。

坂上 意外とやっていけるもんですよ。

知里 いいえ！私は絶対に、今日で辞めますから。

郁美 はーそうだったんだ、全然知らなかった。  
岡部 え？  
郁美 私はそういうの全くないなあ、ストレスとか。  
岡部 えっ、そうなの？  
田中 (ドア1から) 失礼します、ダスチンです。

清掃員の制服を着た田中、やって来る。モップを持っている。

山路 あっ、えっ、田中さん？(目を細める)  
田中 ああちよつと膝を痛めちゃったので今はこちらで。あ、お呼びになりましたよね？さっきお電話で、  
坂上 ああはい私が。(山路に) さっき雑巾取りにいった時に…、  
山路 ええ、  
坂上 だって、  
田中 では清掃入ります。(とモップ掛けを始めるが) あっつう…うつつう…、(膝が痛む)  
山路 ああそんな、やりますから、座ってください、  
田中 いえそんな、(頑なにモップ掛けを続ける)  
山路 言いませんから。誰にも。ね？なので内緒で、  
田中 じゃあすみません。(とモップを渡して山路の座っていた箱椅子に座る)  
山路 ……。(部屋のモップ掛けを始める)  
岡部 でなに？大塚さん初日いやじゃなかったの？  
郁美 ああ。だってここは第一希望の就職先だったし。私、花園火葬大学を主席で卒業したし。  
岡部 火葬大学？  
郁美 うん、焼却部骨壺科。  
岡部 骨壺科…(そして目の前を雑巾掛けする坂上に) あ、俺代わるよ。  
坂上 あ、ありがとう、(雑巾を渡す)  
郁美 (知里に) ねえ。せっかくだから続ければいいじゃん、いい仕事だよ？  
知里 いいえ辞めます。もう用は済んだんです。  
坂上 でもたった一日だけなんて。  
郁美 うん。もう少しくらいいいじゃんね。  
知里 いいえ今だって一刻も早くここから立ち去りたいんです。  
郁美 なんて。  
知里 だって、  
郁美 何が嫌なの。  
岡部 (ドア2を開け) ああこつちにも撒いてるよ、大塚さん。  
山路 えーそうなの？(モップを持ってドア2へ向かう)  
岡部 大塚さん、それ片すから、(灯油缶のこと)  
郁美 ううんいい。  
岡部 いや片すよ、それまだ匂うから。離してほら。  
郁美 やめて！幼い頃に生き別れた実の灯油缶なの。  
岡部 ……は？じゃあまあ…いいけど、

山路と岡部、掃除をしにドア2へ去っていく。

郁美 ねえねえ。何が嫌なの。

知里 ……。私の仕事は創作です。物語を生み出すんです。ひとの人生や物事の移り変わりや、そのあらゆる交わりと行く末を、

坂上 ああ確か小説家だったっけ？

郁美 丁度いいじゃん。

坂上 言わばここが終着点ですよ？

郁美 そうそうその全てがここで終わり。

坂上 人生の大切なラストシーンです。だから色々参考になりませんか？

知里 いいえここじゃただただどんどん燃やしてるだけじゃないですか！お弔いもへつぺくれもなく。へつぺくれ？

知里 そんなんじゃ駄目なんです、ひとの人生って、そんな風に終わらせていいものじゃないんです。

坂上 (田中に) へつぺくれって、

田中 言い間違いです、ただの言い間違い、

知里 こんな風じゃなくて、もつとやりようがあるでしょう！

郁美 あああ。ここに花とか写真を飾って、最後のお見送りーとかなんとかちゃんちゃん？

知里 いいえ。慎ましやかなものでも、もつとしつかりしたやり方で、

郁美 茶番だね。

知里 は？

郁美 こりゃあなたの小説も茶番だわ。

知里 はあ？何を、

郁美 あのさあ、今やもうナイアガラの滝だよ？多くの御高齢者がこう一斉に、ガーツと死んでんの、ええだからこそ何とかしててくださいって。残された者の気持ちを、

郁美 残された者？

知里 ええちゃんと悲しんで区切りをつけてこそ、前向きに生きていけるんです。

郁美 いやいやあのさ、わかってる？ 私たちはね、その滝よりも更に凄い。

知里 は？

郁美 私もあんたもナイアガラより大きな、イグアスの滝、悪魔の喉笛。

知里 何言ってるの？

郁美 だから今がもうその、ガーツの最中なんだって。ほら私たちがもうみんな、ガーツで押し出されてんじゃん。

知里 何言ってるんだよ、

郁美 ああもう、教室はすし詰め、校門は毎朝渋滞だったでしょう？

知里 ああ、プールは芋洗い、全校集会で体育館の底が抜けたよ。

郁美 ほらもう、誰が誰やら分からなくなるくらい、大勢居たでしょうが！

知里 ああ、ぜんっぜん覚えてねえよ。だから何なんだよ！（郁美に掴みかかる）

郁美 何すんだよ、（反撃する）

二人 (そして取っ組み合いの喧嘩が始まる。ぶつ。蹴る。髪をひっぱる)

坂上 やだちよつと、やめて、ねえ、

田中 (箱椅子の上に立ち上がって) いい加減にしなさい！二人ともケツバットだよ！！

田中の怒声で全員がハツとして完全に静止。静止のままの長めの間。そして。

坂上 田中…先生…？

郁美 あ…：ほねろつく…：…？（知里に対し）

知里 え……ごりらんど……？（郁美に対し）  
郁美 ええっ……？！めがこんぐ……？？（坂上を見る）  
坂本 えええっ……！……おじきんぐ……？ちびちんこ……？（ドア2を見る）  
田中 ああああっ……！……四年九組……四年九組……、

そして口々に右記のあだ名を口走り、ざわつきながらドア2へ去っていく。  
郁美は灯油缶、知里は消火器を持って。

## 葬儀

全員が去るのと入れ替わりに、葉伊里、ドア1からスマホを見ながらやって来る。

葉伊里 先生、なんか留守電入れました？今気づきました（と顔を上げ）……あれ？（そこにドア1をノックする音）  
ああすみません。今休憩時間中……（と椅子に寝転びスマホを見ると）あっ今終わりました、なんでしよう？（と椅子から飛び起きる）

客3（声） 本日十三時に予約をさせて頂いていた者です。

葉伊里 ああえつと、（柵から用紙を取り読む）「らくらくフィニッシュ！パッとナムナム追悼プラン」ですね。  
客3 はい……。 （部屋に入ってくる）

ドア1から来るのは四十代男性と三十代女性と二十代女性に見える、とても普通でまともな三人。  
四十代男性が客3背路戸、三十代女性が客4野流亜度、二十代女性が客4亜度。  
上質な喪服を着ており手に数珠、客4は遺影を持つている。  
遺影は南米風のアロハシャツを着た、明るい笑顔の十代男性。

客4 よろしくお願ひします……。

葉伊里 えつと、ではまずはじめに、（用紙を読む）「お手を合わせてのんたんタイム」そして「遺影でイエーイ・愛のシャッターチャンス」……そして最後に、「三途ボンボヤージュ」になります。

三人 ……………。（客3は涙が込み上げ、客4は葉伊里を睨み、客5は床を蹴る等）  
葉伊里 ……すみません。ではこちらにお並びいただいて、（とロールカーテンを下ろすと、とても安っぽくぞんざいな葬儀と参列者の絵が映る）あ。

客3 仕方ないんだ。仕方ないんだよ……！

客4 分かっています……！

葉伊里 ……ああ、えつと、（遺影を見て）お若い方なんですな。（映像オフ）

客4 ええ、いつも元気な子でした。活気に溢れて感受性が豊かで、喜ぶときも悲しむときも精一杯……、

客3 ええ、側坐核や前頭皮質で、楽しく暮らしていました。

葉伊里 ……え、そくざかく？

客4 はい。大脳基底核です。土堀知里の脳内に住んでおりました、土尾派民（どおばみん）といひます。

葉伊里 え……先生の……？

客3 はい。感情を豊かにし意欲や多幸感をもたらす、脳内の神経伝達物質です。

葉伊里 え………、死んじやったんですか？先生のドーパミン、死んじやったんですか……？！

客3 はい。

葉伊里 なんです？

客3 あ。わたくし背路戸任（せろとにん）と申します。土堀さんは特に趣味も運動習慣もなかったもので、  
客4 それに更年期です……あ。わたしは野流亜度玲奈鈴（のるあどれなりん）、こちらは亜度玲奈鈴です。

葉伊里 いやあの…先生はこれから…思いつきり咽び泣いて、晴れ晴れと心を開放して、創作に意欲を燃やしていかなきゃいけないんですけど…、

客3 それは、  
客4 もう不可能です。

葉伊里 いやいやいや、つか先生のドーパミンってこんな爽やか青年だったんですか？

客4 残念ながらもう二度と、心は震えません。

葉伊里 そんなの困ります、なんとかしてくださいよ。

客3 しかしそう言われましてもわたしは心を落ち着かせることしか、

客4 わたしはストレスに対して奮起したりイライラすることしか、

客5 (奇声をあげる)

客3 この子はこうして興奮することしか出来ませんので。

客3 (あからさまに優しく) まあまあ落ち着いてください、

客4 (あからさまにイライラし) ああもうさつきからここが痒いの、なんなのもう、

客5 (あからさまに興奮する)

客3 ねえ落ち着いてつてば、もう嫌だこんなの…(膝を抱えてしゃがんで小刻みに震えるなど)

客4 ああこもなんかカサカサしてる、痛痒い、痛痒いのよ、(どこかを闇雲に掻きむしるなど)

客5 (二人の周りをひたすら走り回るなど)

三人 (それぞれに続けて)

葉伊里 …先生の頭の中って、今こんな感じなんですか？

そこでドア1が開き、唐突に機関銃音。客5、流れ弾に当たる。葉伊里、舞台端に逃げる。

まず手下共の客8と客9、機関銃と銃を持ち、ドア1からやって来る。

続いていかにも南米マフィアのドン風の客6エル・ドーパと、客7その女房フローラ、やって来る。

客6は葉巻と杖、客7は色鮮やかな花束を持っている。

客6 (葉伊里に) ハハハハ、オラ、セニョリータ！

葉伊里 ¿Qué es? ¿Quién eres? ¿Qué deseas? (ケエス、キエンネレス、ケデセアス何ですか、あなたは誰ですか、

何の用ですか?の意)

客6 ごめんなさいスペイン語はちょっと。

葉伊里 ああそうですか。

客7 花を手向けに参りました、母のフローラです。

客6 腸内細菌だ。

客7 こちらはドン・エル・ドーパ。

客6 (遺影に) 我が息子よ…。

葉伊里 あ。ドーパミンの…御両親ですか？

客6 (客3らに) 脳内の奴らほとつとと失せる。この軟弱な役立たずが！

客7 末の子までこんなことになるなんて、あなた達はいったい何をやってたの！故郷から遠く離れた地で、あ

なた達だけが頼りだったはずなのに、どうしてこんな…! (咽び泣く)

客6 (客7を思い切り平手打ち) 泣くな、(そして連続平手打ち) 泣くんじゃないと云ってるだろう、

三人 (手下らに銃を向けられ、負傷した客5連れてドア1から逃げていく)

葉伊里 やめてください、末の子って…じゃあお兄さんとかお姉さんとかは、

客7 (大声をあげて泣く)

客6 (客7を思い切り蹴り飛ばすなどしながら)泣くな、最後は笑ってやるんだ、泣きやめ、ハハハハ、笑うんだよ、ハハハハハハハハ、

葉伊里 やめてくださいってば！(客6を止めて)ねえ、だったらまた産むとか出来ないんですか？

客7 (ピタリと泣き止む)

葉伊里 ほら、腸の中でお二人から、産まれたんですよ？(と遺影を手にとり)それで遠く脳内に旅立たれて…

客7 (頷く)

葉伊里 だったらまたほら、産んでください。ね？強く逞しい子を…、

客6 (杖をつきつつ葉伊里に)…ボニータ、どうか花をあの子に。(手下らに)ブラウン・ベン、イエロー・ベン。手下ら (花束を拾って葉伊里に渡す)

葉伊里 (二人の匂いに咽せ返り、強い嘔吐をもよおす)

客6 (遺影に)ああアミーゴ…さぞ寂しかったろう。

客7 (客8に)お願いします。

客8 (客7に大きなナイフを渡す)

葉伊里 (嘔吐を抑えながら)あつなにを…、

客7 (素早く客6の首を斬る)

客6 (喉から血を噴き出しながら笑い)グラシアス！ボニータ、グラシアス！

客7 (泣き笑いながら)アディオス…！(自分の腹を刺す)

葉伊里 ちょっと、何してんですか…！

客6 我が一族は滅びゆくのだ！ああ綺麗さっぱりとな！

葉伊里 え、

客6 もう二度と、こんな風に笑うことはなくなるだろう…！

葉伊里 あ……。先生……。

二人 (口々に)ミ・アモール…(壮絶に苦しみながら、濃厚に抱き合い愛撫し合いイチャつきだす)

客8 あとはお任せください。

葉伊里 え…？

客9 トイレはどこです？

葉伊里 ああその入り口の脇に、(とドア1を指す)

客8 (客6を抱える)

客9 (客7を抱える)

葉伊里 あ…トイレに流すんですか？

客8 アディオス。

葉伊里 ああはい、アディオス…。

瀕死の二人を抱えて、手下らドア1から去っていく。葉伊里、一人残される。

葉伊里 先生…。

音楽はそのまま映像イン。葉伊里は舞台端の箱椅子に座る。

## Film 抗議

「Hottest Station KASO」店舗の前で、大規模な道路工事をしている様子。

ニュース声「滝壺区飛泉町の「ホットテストステーション火葬」周辺では

大規模な道路の修復工事が行われておりますが、

ただいま他の店舗には、続々と近隣住民が押しかけている模様です。  
住宅街に乱立した火葬場に、近隣住民の不満の声が上がっている模様です。」

(コンビニのように火葬場が乱立している町で)

住民男性1 「なんか匂いが酷いんだよ、洗濯物も外に干せないし、」

住民女性1 「ずっと気分が優れないんです、何か有害物質が出てるとしか思えません。」

住民男性2 「こんなんじゃ子供を外で遊ばせることも出来ませんし、」

住民女性2 「ほら煙が上がるでしょう、散歩も出来ないし気が滅入るんです。」

ニュース声 「そこで汎愛社は会見を開くと共に、各地で説明会を開き、対応にあたっています」

(住民説明会の様子。※社員3と5は男性、4と6は女性)

社員3 「えー汎愛社の火葬場では、焼却の際の噴煙を全て再燃焼処理しております、」

社員4 「匂いや煙の類は一切、排出してはおりません。」

社員5 「またもちろん目に見えない有害物質などにつきましても適切な処理をおこなっておりますので、」

社員6 「近隣住民の皆さまには何ら、影響がないと断言いたします。」

(説明会に押しかける住民たち)

住民男性1 「いや出てるぞ、煙!」

住民女性1 「絶対出てます、匂います!」

住民男性2 「じゃなかったらどうして、」

住民女性2 「こんなに気分が悪いんですかー!」

住民ら 「(嘘をつくなど口々に野次る)」

社員3 「いえ本当です、まったく煙も匂いも出していませんので、」

社員4 「どうか落ち着いて下さい。」

住民ら 「(口々に騒ぐ)」

社員5 「あ。ついでに申しあげますと汎愛社では、この度の経営再編に伴い、

社員6 「四、五十代の業務員の大量解雇を、決定いたしました。」(大きめのテロップ)

住民 「そんなことはどうでもいいんだよー!」

住民ら 「そうだそうだ!」「どうでもいいぞー!」(と一段と騒ぎ、物を投げつけるなど)

## 解雇

郁美、山路、岡部、坂上、ドア2から笑いながらやって来る。同時に映像カットアウト。

以降、台詞中のそれぞれのタイミングで箱椅子に座る。郁美は灯油缶を抱えたまま。

山路 いやあ驚いた。

岡部 まさかねえ。

坂上 (葉伊里に) ああ店番ありがとう。ごめんなさい、すっかり話し込んでしまった。

葉伊里 あ、先生は、

郁美 ああなんかお腹くだしたみたいで、さつきからずっとトイレに籠ってるけど。

葉伊里 ああ……。

坂上 (ロールカーテンを上げながら) 留守電、聞いてないでしょ?

葉伊里 あ、そうだった。

山路 大丈夫。ごりらんどが弁当を買いに行ったから。  
葉伊里 え？

郁美 うん。カップ麺なんかはあったんだけどねー、  
山路 ちびちんがどうしても弁当がいいって言ってるよ、

岡部 おじぎんぐーまた俺のせいにするー。(と山路をヘッドロック)  
山路 ギブギブギブ、助けてめがこんぐー。

葉伊里 何ですかそれ、何言ってるんですか。

坂上 ああ私たちね、みんな四年九組の仲間だったの。

山路 ほんと、なんでこれまで気づかなかつたんだろう。

坂上 そりゃ随分変わっちゃったもの。

岡部 おじぎんぐは昔からおじぎん臭かつたけどな。

山路 そんなことないよー。

郁美 (葉伊里に) ほらバイトの田中さん、あの人たなぼた先生だったんだよ。たなぼたもちこ先生。

山路 ああもちもちと太ってるな。

岡部 いや痩せてたよ。餅を喉に詰まらせたんだってば。

坂上 いいえ中肉中背でした。もち肌だったのよ。

郁美 まあとにかく、九組の仲良し五人組が、再びここに集結。

葉伊里 ……え？なに？五人組って、…じゃ、もしかして先生も？土堀もですか？

山路 そうなんだよ。ほねろつくって呼ばれてるな。

葉伊里 へー！

山路 ほら、給食費が無くなっちゃってさ。ごりらんどが集めた、クラスの給食費。

郁美 あああつたあつた！そんなこと。

坂上 そんなほねろつくが疑われたんだよね。そこで大喧嘩になって、それからずっと絶交。

岡部 いやほねろつくが下駄箱に落ちてるのを見つけたんだよ。そこで大親友になって、それからずっと一緒。

郁美 いやほねろつくが犯人だったよ。そこでそれを苦に屋上から飛び降りて、ちようど下に居た私と共に死亡。

葉伊里 え？

郁美 あれ？

岡部 あー懐かしいなあ…四年十八組。

坂上 ええ…ほんとうに。

四人 ……。(それぞれ記憶に疑問を持つ間)

山路 あーしかし遅いな。しおこんぶのやつ、大丈夫かな。

葉伊里 (山路を見る)

坂上 ちよつと様子を見て来ましようか。ついでにデザートでも買って来ます。

岡部 ああ行こう、(ちよつと考えて) でこぼちーの。(ドアへ)

坂上 ええ、(ちよつと考えて) ひざぼんばー。(ドアへ)

郁美 (二人を見送って) ああほんとうに懐かしいよ。

葉伊里 そうですか？

山路 ちよもらんまのお母様のこともよく覚えてるよ。凄く優しいひとだったね。

郁美 いやいや凄く怖くて不気味でおどろおどろ(しくて)

葉伊里 (遮って) もういいです。

郁美 (なんで?と思う)

山路 いやしかし。せつかくみんな揃ったつてのになあ。残念だよ。

葉伊里 え？

山路 今日でもう辞めちゃうんでしょ？ほら二人とも。  
郁美 ほんと頑固だよね。  
葉伊里 あー…そんなこと言っていましたか…。  
山路 うん。  
葉伊里 でもですね、あのひと、ここで働く方がいいと思うんですよ。  
山路 うん？  
葉伊里 いやなんつうかこう…体調的なあれで、もう…、  
郁美 え？なに？インフェルノクイーンってどつか悪いの？

そこでトイレの流れる音がして、知里ドアからやって来る。

知里 あー大変だった。  
郁美 あ、インビジブルガーディアン。スーパーノヴァビーナスがいまそっちへ、  
葉伊里 なんかもそれもうやめてください。  
知里 あんた…留守電はちゃんと聞けって言ってるじゃん、前々から。  
葉伊里 ああはいはい気をつけますー。  
知里 なにその態度。  
葉伊里 ねえ先生、ここ辞めないでください。  
知里 は？  
葉伊里 せっかく同級生だったんならちようどいいじゃないですか。ここでちゃんと働いてください。  
知里 何言ってるの。  
葉伊里 そんな状態じゃ、何も書けないでしょう。ね？  
知里 え、ちよつと何？やめて。  
葉伊里 絶対無理なんですって。わかるでしょう。諦めましょう、ね？  
知里 は？あんたに何がわかるの！ここを乗り越えたら大丈夫なんだよ！  
郁美 ちよつと知里ちゃん、落ち着いて。  
知里 うるさい。  
郁美 ねえいいじゃん。ほら一緒に働こう。私たち、大親友だったじゃない。（と知里の腕を取る）  
知里 （それを振り払い）いいや。給食費がなくなってあんたらに疑われてからは、登校拒否だったから。私ずつと。  
郁美 え。…そうだったっけ？  
知里 そうだよ。  
郁美 あそう…？（そして山路を見る）  
山路 あー…。…（そしてドア2の方を見る）  
知里 とにかくここさえ乗り越えたら大丈夫だから。  
山路 なんだ。電話線切れたままだな。  
郁美 え？  
知里 なんかね、行ける気はしてるんだよ。  
山路 なんて誰も直さなかったの。（と電話の方へ）  
知里 だから何とかしてこう、意欲を燃やさないと。  
郁美 そうか。

山路 （電話線を繋ぐ）

と同時に、電話が鳴り出す。

山路  
電話だよ。

郁美  
あ。なに山路、電話線繋いだんだつたら責任とって出てよ。

山路  
ずっと我慢してたんだよ。やつとトイレ開いたんだから。(とドアへ去る)

郁美  
もうなんなの。(そして電話をとる) はいもしもし汎愛火葬…じゃなくてホット、なんだつけ？ まあいいや、ホットドックプレスです。いメールのチェックはしてませんが。はいすみません、名簿のチェックに

ちよつと忙しくて…。あはい。あはい。あはい。ええっ…?! (受話器を持ったまま解せない顔)

社員3  
あーやつと辿り着いた。凄い工事だな。

社員4  
ええ酷い。どんだけ迂回させるんでしょう。

社員3と4、ドア1からやつて来る。社員4はブリーフケースを持っている。

社員3  
ああなんだ、やつぱり居るじゃん。

社員4  
もー全然電話も通じないし、連絡がつかないから。

郁美  
あ。いま電話が。(受話器を見せる)

社員3  
あ、なに？ やつと電話出たの？

郁美  
はい。なんかいま本社から… (解せない顔で受話器を見る)

社員4  
やだもう、わざわざ来る必要なかったんじゃない。

社員3  
いやずつと掛けてたんだよ、何してたんだよもう。

郁美  
いやあ。

社員3  
なんかまだ居るって報告受けてさ、びつくりしたよ。

社員4  
とにかくこの度の経営再編でね、四、五十代の業務員は漏れなく全員、解雇になったから。

葉伊里  
えっ？

社員3  
その電話をね、ズーつとしてたんだよ。

郁美  
(電話を切る)

社員4  
(鞆から封筒を四つ出して) はい、解雇通知書。全員分ね。

社員3  
あと労災の手続きの書面も入ってるから。

郁美  
ろうさい？

社員3  
ほら、あの爆発事故の。あれ前の火葬炉がね、需要の増加に耐えられなかったの。だから百パーこちらの過失で計算されてるから。

社員4  
事故直後は全員消息不明だったでしょう。だからあれだったんだけどねえ…、

郁美  
いやそりゃ飛び散りもしますよ、直撃したんですから。

社員4  
うん。だからはいこれ。(封筒を郁美に渡す)

社員3  
誠に、申し訳ありませんでした。(お辞儀)

郁美  
(葉伊里を見る)

社員4  
(共にお辞儀したのち) はい。じゃ早くここから出ていってくださいーい。

郁美  
いや、じゃあここは…？

社員3  
ああいま新しいバイトさんを探してるから。ご心配なく。

郁美  
(思わず笑って) え、なんで。私たち居ますよ？ (葉伊里に) ねえ。(社員らに指で丸を作り) ほら、視界はこんくらいつしかないですけど、山路も岡部も坂上も居ます。

社員3  
でも本社が決めたことだから。

社員4  
なので安らかに、成仏してください。(と郁美に向かって手を合わせて頭を垂れる)

社員3 ……………。(同じく)  
社員4 (しばししてから顔を上げて驚き) ……ああやだ。まだ居ます?  
社員3 どうかとつとと、成仏してください。(また手を合わせて強く念じる)  
社員4 (お鈴を鳴らしお経を唱え始める)  
郁美 無理。  
社員3 え?  
郁美 (お経を唱える社員4の頭に灯油を巻き始める)  
葉伊里 あつちよつと! 何してるんですか!  
郁美 え? なに? どうしたの。(と言いながらも、社員4と3に向かって灯油を撒く)

何をするんだと騒ぐ社員ら、止める葉伊里と止まらない郁美で、揉み合いになる。  
しばしそれを眺めていた知里が何かに滾り、唐突に叫ぶ。

知里 シレンシオー! セニョール! セニョリーター!  
知里以外 ……?(静まって知里を見る)  
知里 グラシアス。  
葉伊里 ……先生?  
知里 三十日間。  
社員3 え?  
知里 解雇通知は三十日前に出さなきゃいけないのですよね? 今頂いたのなら今から三十日間の猶予があるはずです。  
社員4 なに?  
知里 ですのでひとまずお引き取りください。アディオス!  
葉伊里 先生?  
知里 行こう。  
郁美 え、どこへ?  
知里 いいから行こう。(郁美の手を引いてドア2へ)  
郁美 え、なに。怖。(知里に手を引かれドア2へ)  
葉伊里 先生?  
社員4 (葉伊里に) ねえちよつと待って。あなたはいつからここに? いま二十代のバイトを募集中なんだけど、  
葉伊里 先生…?(とドア2へ去っていく)

## 帰還

呆然とする社員3と4。ドア1から、ボロボロの風貌にずた袋を持った若い男(かけら)と、上品な高齢の老婦人がやって来る。小さなハンドバックを持っている。

かけら ……あ。失礼します。ちよつとお伺いしたいのですが。  
老婦人 (部屋の中を見回す)  
社員3 はい、なんでしよう…?  
かけら こちらに小谷くんっていう業務員がおったと思うんぼつてん。ほらこの火葬炉でへまぼして、そこん骨壺に…。(と柵の骨壺を指す)  
社員3 え? なに?  
社員4 ああ…! 小谷くんってほら、居たじゃないですか。

社員3 あー…居た居た小谷くん！確か今年新卒で入った、新人さんだったね。  
かけら ああやつぱりここや。僕、小谷くんのかけらばい。  
社員3 …なに？  
かけら うりえー、あぬ爆発つし粉つ々に、散らかちしまてい。  
社員3 なんなんですか？  
かけら どあんてもう、風に乗っていつペー遠くまで、飛び散ろーんです。  
社員3 は？  
かけら ああごめんなさい。僕、これっぽっちのかけらだったもので。なのであちこちで小谷くんっぽいかけらを拾い集めながら、ほら、こうしてやつと、이렇게 되었습니다。(イロケトウヨスミダー。こうなりましたの意。)  
社員4 なんですか？  
かけら あー、*Miss*。(マンディー。良かったの意) *My darling*。(サワディーカップ。と、手を合わせる)  
社員3 いやあの、拾い集めてきたって…、  
社員4 多分、違うのが結構、混ざってると思うんだけど…、  
かけら ナマステナマステ。  
社員3 えっそんな遠くまで飛ばされたの？  
社員4 なんかやたら南西の方に飛ばされたんですね、  
社員3 で。こちらは…？(老婦人のこと)  
かけら ああ。そこで見かけて、彼女もそうかなあつて。  
老婦人 はい。そこで声を掛けられて、私もそうかなあつて。  
社員4 違うと思います。  
老婦人 え？  
社員3 そもそもかけらじゃないでしょう。  
社員3 そうかしら。  
老婦人 そうですよ。  
社員3 やだごめんなさい。なんかいつの間にかそこに居て。その上この工事での辺ずつとぐるぐる迂回してたもんだから、もうワケわかんなくなっちゃつて。  
社員4 大丈夫ですか。  
老婦人 ああ大丈夫。ほら元気なのよ、なんか凄く。(激しく連続ジャンプしながら) 骨粗鬆症なのにねえ。  
社員3 やめてください！  
老婦人 平気平気。(激しく反復横跳びをしながら) もう長いこと心臓も患ってるんだけどねえ。  
社員4 やめてくださいってば、ちよつと！  
老婦人 (笑つて) 大丈夫、安心して。私、娘の書くお話を読むまでは絶対に死ねないもの。ほら、お父さんなんかね、何のへつぱくれもなく死んじやつたけど。でも私は絶対。  
社員3 へつぱくれ？  
老婦人 なのにあの子つたらなかなかなのよー。もう、どんだけ期待させるのかしらー。(激しく走り回る)  
社員4 もうやめてくださいってば！  
老婦人 もうほんとドキドキよ。あら、鼓動がしない。  
社員4 あああの、家の住所わかります？(社員3に) 私、ちよつと送って行きますね。  
社員3 ああ頼むよ。  
老婦人 そんなの悪いわよ。いってば。  
社員4 いや行きましょう。(とドアへ向かい)で、どうします？その…小谷くんとか何なんだか。  
社員3 ああまあ…せつかくの新人さんだし、とりあえず本社に連れてくよ。

社員4 そうですね、お願いします。さあほら。（とやたら元気な老婦人を何とか連れて、ドア1へ去っていく）  
社員3 （二人を見送ってから）じゃ、小谷くん。  
かから ニャー。  
社員3 え、小谷くん？  
かから ワン。  
社員3 ああなんだ。動物も混じっちゃってるよ…。ほら小谷くん、行くよ。（と両膝を叩き）こつちだ。  
かから ホーホー、ホッホー。ホーホー、ホッホー。  
社員3 ……鳩だね。  
かから ホ。（そして唐突に両手を羽ばたかせて、社員4が開けたままにしたドア1に飛び立っていく）  
社員3 ああちよつと待って小谷くん、小谷くん…！（追って羽ばたき去っていく）

客

社員3が去ると開いたままのドア1から、スーパーのエプロン姿の奥さん、やって来る。  
プリンが入った箱を持っている。

奥さん あーやつと着いた。あなた1差し入れ持って来た。今日からここ開店なんですよ？（ドア2を叩き）あな  
た1？もう休憩時間終わっちゃうからー。居ないのー？

ドア1から客10こびとがやって来る。ディ○ニー系こびとのリーダー。ツルハシを持っている。

客10 ああどうも。ちよつとお願いしたいんですがね。  
奥さん あ、すみません。今ちよつと、  
客10 いやもうそこまで運んで来たんで。七人で。  
奥さん ……え？  
客10 なのでどうぞ、お願いします。  
奥さん 火葬ですか？  
客10 はい。  
奥さん いえあの、もう少しお待ちになった方がいいんじゃないやありません？  
客10 え？  
奥さん だつてほら、その方…、林檎とか食べてません？  
客10 だからなんなんですか？  
奥さん だからほら、もう少しお待ちになれば、  
客10 え？なんですか？ここつてそういう、受け入れ拒否とかするんですか？  
奥さん いえいえそういうんじゃないやなくてですね、

そこにドア1から客11のブラッ○ジャックがやって来る。。汚い袋を持っている。

客11 すみません、火葬をお願いします。  
奥さん あ。

客11 オペで取り出した畸形嚢腫（きけいのうしゅ）、全身分です。お願いします。（と袋を差し出す）  
奥さん えつ組み立てないんですか？  
客11 えっ？

奥さん だつてそれ、なんかほら、患者のお嬢さんから取り出したんですよ？

客11 ああまあ。  
奥さん だつたら、  
客11 何です？  
客10 ここつて受け入れ拒否とかあるみたいですよ。  
客11 ええっ？  
奥さん いえそういうんじゃないくて、組み立てててくださいよ。そしたらほら、小さな可愛らしい、ね？  
客10 ほらね。拒否をするんですよ。  
客11 ひどいな。  
奥さん いいえ違うんです、

そこにドア1から、全身白タイツか全身白服の客12小麦粉、やって来る。  
イースト菌と書かれた箱を持っている。

客12 すみません、焼いてください。  
奥さん …あ。(その風貌を観察し) 何をでしようか？  
客10 ああイースト菌。あんた小麦粉だね？  
客12 ええそうです。お願いします。  
奥さん そんな。パンが焼けてしまいます。  
客12 はい。  
奥さん 困ります。  
客10 ほら拒否した。  
客12 なんでダメなんですか、小麦粉ですよ？  
奥さん 生や生焼けじゃお腹を壊しますから。  
でも、  
客10 いいから早くしてください。最初は私です。  
奥さん いやだつてあなたほら、物語が、ねえ。  
客10 は？  
奥さん あなたもそれ組み立てて。  
客11 いやそんな。縫合手術もその後のリハビリも、そりゃあとてつもなく、大変なものなんですよ？  
奥さん だからですよ！だからこそ全編に渡つて登場して、物語の重要なエッセンスに、  
客11 いいですよそんなの。忙しいんです。  
客10 私だつて忙しいんです。  
奥さん 私だつて忙しいんです、  
客12 私なんかもう発酵してるんですよ。時間がありません、お願いします。(とドア3へ向かい)  
奥さん あつちよつと待つて困ります、  
客10 (ドア1を開けて) おおいみんなー運んじやつてーハイホーハイホー。  
奥さん ああやめて、  
客11 さあこの間に一緒に焼いてしまおう。  
客12 はい。(とドア3へ入ろうとし)  
奥さん やめてくださいって！(とロールカーテンを下ろしつつ) どうかハッピーエンドを待つてください。  
客10 …ああしょうがない。森かなんかに埋めるとするか。  
奥さん え。  
客11 じゃあこれもお願い出来ますか。

客12 私も一緒に。  
客10 そうしましょう。

三人 (メルヘンな音楽イン。意気揚々とドア1へ向かう)  
奥さん あ、ちょっと待って、埋めないで。(ドア2に向かつて) あなた、プリン置いてくから! (と箱椅子に箱を

置いて) ねえ待って! 小麦粉さんはうちで焼くからー! (と追っていく)

そうして四人、ドア1へ去っていく。

四人去って少しすると岡部と坂上、ドア1からやって来る。

坂上は奥さんと同じ箱を持っている。

## 執筆

岡部 おーい。プリン買ってきたよ。(誰もおらず) あれ?

坂上 (箱椅子の上に同じ箱があることに驚く)

岡部 (ドア2に) ねえプリン(買ってきたよ)

葉伊里(声) 静かに! いま先生がなんか書き始めるところなんです。

岡部 は?

葉伊里(声) だから邪魔しないでください!

岡部 ……なんなんだよ。

坂上 ……。(箱を見続けていて)

編集者(声) すみません。

岡部 ああ誰か来ちゃったよ。ちょっと様子見ってきてよ。

坂上 あ、うん…。(と一旦ドア2へ去っていく)

編集者は白髪にジャケット姿の女性。興奮気味にやって来る。

ハンドバッグとプリンの箱を持っている。

岡部 ご予約ですか? 受け取りですか?

編集者 (ドア1から) いいえわたくし白土葉伊里さんからご連絡を頂いて参りました。土堀先生が遂に執筆を始められるということで。(プリンの箱を箱椅子に置いて)

岡部 はあ。

編集者 待ちに待っております、ようやくです。どうやって焚きつけたんです? 本当にありがとうございます。  
(と名刺を岡部に渡して握手を求める)

岡部 はあ。(握手に応じる)

坂上 (ドア2から戻って来つつ) なんか知らないけどとりあえずここ見ててっつて。

編集者 あ。土堀先生はそちらで?

坂上 え? ああはい。なんか今…、

編集者 いえいえ邪魔してはいけないので。わたくしが来たことはとりあえず内緒で。

坂上 はあ。

編集者 (岡部に) こんなことは初めてで。早速各所に連絡入れました。もう大騒ぎですよ。

岡部 あー、なんかそんな、凄い感じなんですか?

編集者 ご存じない? (柵のリモコンを取って) もういま大変なことになっていますよ。(とりリモコン操作)

坂上 (箱椅子に更に同じ箱があることに驚く)

映像イン。火葬場周辺の工事現場の前。

レポーター「只今、土堀知里さんが執筆を始めたという情報が入りました。現在こちらでは工事がおこなわれていますが、この向こうにある建物内で土堀さん、遂に執筆を開始したようです。」

ファンら「土堀先生」「待つてましたー」「頑張つてください」「楽しみ！」

老婦人「これを読むまでは絶対に死ねないの！」

(その傍に老婦人を探す社員4が映り込む。)

レポーター「このように早くも噂を聞きつけたファンが集まっております。また書店には大段幕が掲げられ…」

(大型書店の大段幕。)

老婦人「(歓喜の声を上げる)」

レポーター「(イヤホンに耳を傾け)：あ、ただいま世界各都市でも騒ぎが起きています。様子です。」

ファンら「Tsuchiborii! Tsuchiborii!」

(ネオン煌めく夜のタイムズスクエアで、各国ファンが盛り上がっている)

レポーター「この度の作品は出版されればノーベル文学賞が確実と言われており、このように多くの人々が期待を寄せております。世界中がその完成を待ち望んでいます。」

(昼の都市で祭りが始まり、夜の都市に火花が上がリ、やたら盛り上がる世界中のファンらの様子)

映像中に坂上は、箱を舞台端の箱の上に重ねていく。以降、ファンらの映像が映つたまま。

岡部 …はああ凄い。

編集者 では頃合いを見てわたくしが来たことお伝えください。くれぐれも邪魔などされないように。

岡部 あー、ごめんなさい俺こんなのぜんぜん。あ、なんか一冊、オススメとかあります？

編集者 え？

岡部 代表作とか。

編集者 ございません。

岡部 いやいや何でもいいんで。

編集者 いえいえ何にもございませんから。

岡部 え？

編集者 先生はこれまで一度も、何かを書き上げたことがございません。

岡部 は？

編集者 一冊どころか一ページも。

岡部 ？

編集者 ああ一ページどころか一行も？

岡部 え…誰も何も読んだことがないんですか？(と映像を見て)この人たちも？

編集者 ええもちろん誰一人として。

岡部 じゃあなんでこんな…(映像のこと)

編集者 だからこそじゃないですか。

岡部 は？

編集者 だからこそです。

岡部 はあ…

編集者 なのでどうぞあなたも楽しみなさってくださいな。

岡部 いや、何を楽しみにすればいいんですか。

編集者 じゃ不用意に顔を合わせてもいけませんのでわたくしは。(とドアへ向かい)

岡部 いやあの…

編集者 お願いますよ、あなた方だけが頼りです。何せ先生は何も書いたことがないどころか、何も読んだことさえないんですから。

岡部 えっ、そうなの？

編集者 ええ確に。

岡部 はー。

編集者 じゃ、よろしく。世界中が楽しみにしているんです。（去っていく）

岡部 あ、待つて。え？ みたいないったい何を楽しみにしてるんですかー？

ドアが閉まって少しの間。

坂上 （三つ重なった箱をずっと見ていた）

岡部 （坂上に）…ねえこれって、

坂上 プリンが増えた。

岡部 え？

坂上 プリンが増えたよ。

岡部 …は？

華々しく童話の開幕的音楽イン。岡部と坂上はプリンを箱を持ってドア2へ去っていく。

### Film Once upon a time

本が開いて「Once upon a time・・・」の文字が煌めく。

そして色鮮やかに栄える平和な町の様子。空にはアドバルーンや飛行船や風船。

そこは昭和五十五年の町。高度経済成長終焉後の安定成長期。経済規模は拡大中。

賑わう商店街の一角には、西洋のお城を模したお菓子屋がある。店舗住宅の小さな建物。

看板には「土堀製菓」。その店頭には、エプロンにスカーフ、中世風の帽子を被り玩具の刀を下げた店員が立つ。

店員 「さあさあ美味しいプリンは如何かな？ 甘い甘いチョコもあるぞ。」

子供たち 「欲しい！」「いらない！」「お金ない！」「私ある！」など騒ぐ。

（群がる子供たちは、小四の郁美、山路、岡部、坂上。黄色い帽子や赤白帽。黒いランドセルと赤いランドセル。）

### 生家

映像は消え、映像音楽のまま、雰囲気のある明転。

小四の知里、大きな童話の本を持ってドア2からやって来て、箱椅子に座る。

知里が本を開くと映像カットアウト。若かりし頃の田中、やって来る。

田中（声）すみません、どなたかいらつしやいますか？

知里 （無視して本を読み続ける）

田中 （ドア1からやって来る）あ、ねえ知里ちゃん。どうしたの、まだ具合悪いの？

知里 ……。 （首を横に振る）

田中 だつたら、ねえ、ちゃんとみんなに話をしよう。先生はほら、疑つたりしてないから。だから明日こそ学校に来てお話をしましょう。

知里 （本から目を離さず）&&#%。%

田中 なに？



ドア1から若かりし頃の老婦人。やって来る。頭に王冠を乗せており、何かを持っている。

老婦人 はい仕立て屋から注文の品が届いたわよ。(何かを父渡すパントマイム)

父 おお間に合ったか。素晴らしい。愚か者には見えぬ糸で作られているとはな。

老婦人 ええ素晴らしいわね。(そして一旦ドア2へ)

祖母 あのスープを飲めば誰より強くなれるのだ。まずはお前の血を一滴。(と知里の手に針を刺す)  
痛つ。お婆ちゃん、何すんの。

父 ふん。(と王冠を外す)ふん。(とカツラを外す。すると禿頭)

知里 (驚く)

父 (そして愚か者には見えないカツラを被り)さあこれで明日店頭に臨むぞ。どうだ？見事だろう。

知里 お父さん、ちよつと何やってんの！

老婦人 (ドア2から大きな鏡を持って戻ってくる)鏡よ鏡、世界で一番、背が高いのは誰？「イリノイの巨人と呼

ばれたロバート・ワドローさんです。」(感嘆の高笑い)では、世界で一番軽い人は、

知里 お母さんはギネスブック読んで。ねえ。

老婦人 (鏡に向かって呟き続ける。※以降もずつと)

祖母 さあさあこの血を鍋に。(と本を取り上げて知里の手を引く)

知里 あ、やめて。本を返して。返してよ。

父 (祖母から本を奪い)もうこんなものは読んじゃいかん。

知里 何言つてんの、返してつてば。

父 いかん。(と本で知里を叩き)現実を見るのだ、現実を！

知里 ……え？

祖母 そうだよ、そんな作り話ばかり読んでいては駄目だ。くだらない。(唾を吐く)

父 いいか？今後更に世界は発展し、益々繁栄し続けていく。人々は豊かになり続けるのだ。

祖母 ああ我が国も永遠(とわ)に栄華を極めるだろう。

知里 はあ…

父 だからお前は誰より勉強して、我が国を支えていかねばならん。

祖母 それか誰より有能な王子を射止めて、ここに連れてくるがいい。

父 ああ。怠けてはいけない。お前はこの先も誰より、一番でなければならぬ。

祖母 努力は必ず報われる。頑張れば頑張った分だけ、大成功するのだー！

知里 はあ…

父 わかったか、それが現実だ。母上、この本を燃やしてください。

知里 えつ、やめてお願い。お母さん何とか言つて、

老婦人 (鏡に向かって)鏡よ鏡、世界で一番鼻の穴に沢山のマッチ棒を入れたのは誰？

知里 ああお母さんにはギネスブックを買ってあげて、

祖母 ぬおー。(と本に魔法をかける仕草)

知里 ……え、何やってんの。

祖母 ぐおー！(と本に魔法をかける仕草)

父 ばおおおおお。(と言いながら本をビリビリに破り捨てる)

知里 ああああああ…(散乱した本を拾い集める)

祖母 今後一ページでも本を読んだら鞭打ち百回のうえお前の皮を剥いでやる。(知里を怖がらせる)

父 ああそうしよう。(知里を怖がらせる)

知里 ……お母さん、こんな家出て行こう。ねえ、それ離して。行こうつてば。

祖母 そうはさせるか。やあ。(と老婦人に向かって魔法をかける仕草)

老婦人 あああああ。(と魔法にかかったようになって)：チュー。

知里 え？お母さん、どうしたの。

老婦人 チューチュー。チューチュー。(そしてドア2へ小走りに走り去っていく)

知里 ねえ母さん、どこ行くの、

祖母 家中の本を齧っておしまい！

父 さあお前は宿題をしろ。我々は明日の準備を。明日は記念すべき日だ。(そして一旦ドア2へ去っていく)

祖母 ……これはまだ誰も知らぬことだがね、これから一大ブームを巻き起こすであろう、ティラパンナ・タデ・コックタミスという、チョコのような寒天のような、ババロアのようなチーズのような、不思議なお菓子がトルクメニスタンのカラクムにあつてな。

知里 は？

父 我が土堀製菓は明日いち早く、その専門店に生まれ変わるのだ。(とドア2より戻り、ティラパンナ・タデ・コックタミスの文字とイラストが書かれた手持ち看板を掲げる)

祖母 ああ。莫大な金を借り入れて工場も建てた。それはそれは大きな工場だ。

父 今後はこれ一本でいく。これで我々は世界一の栄華を誇るのだ。

祖母 だからお前はその名に負けてはならん。宿題をやりなさい。

父 お前もいかげん、現実を見るのだよ。

知里 何言つてんだよ、お前たちこそ現実見ろよ！

父 なにを…、

祖母 (知里に魔法をかける仕草で) ……お前は屋根裏部屋に閉じ込めてやる。現実が見えるようになるまで、そこを出ることは出来ぬのだ。

父 ああ決してな！

知里 くだらない。(そしてドア2へ去っていく)

祖母 (知里を見送ってから) ……しょうのない子だ。

父 さあ我々は準備を。行きましょう。(とドア1を開けると、郁美の右足が思いきり父を蹴り飛ばす) ……なんだこれは。

祖母 んん未来から飛んで来たようだね。丁度いい。スープに入れよう。

父 ああそうしましょう。

父と祖母はドア1へ意気揚々と去っていく。照明が変わる。

いびき

ドア2から葉伊里と坂上と老婦人が、話をしながら、プリンを食べながら、やって来る。

坂上 え。それからずっと屋根裏部屋に？

葉伊里 はい、そうみたいです。

坂上 え。出られたでしょ？なんで？

葉伊里 さあなんででしょうか…。(と老婦人を見る)

老婦人 私は知らないわよ。鼠だったもの。

葉伊里 あー…、

老婦人 もう家中の壁やら柱をひたすら齧ってた記憶しかないわ。

坂上 本ですか。

老婦人 ああ齧れるものは何でも。だって鼠よ？

葉伊里 だから先生のお宅ポロポロなんですか。

老婦人 お陰でさつきみたいに窓の隙間からお部屋に入るのにも慣れつこで。突然ごめんさいね。葉伊里ちゃん、驚かしちゃってごめん。

葉伊里 いえまたお会い出来て嬉しいです、（箱椅子に座る）

坂上 こちらこそすみません、ささつと火葬しちゃって、（箱椅子に座る）

老婦人 いいのいいの、随分体が軽くなつたし、知里ちゃんの頑張ってる姿がこつそり見れて良かった。（箱椅子に座る）

坂上 ああはい。

葉伊里 …でも屋根裏部屋で何してたんでしよう。少しは何か書いたりしてたんでしよかかね。本が読めない代わりにーとか、

老婦人 どうだろ。あの子、根気がないから。

葉伊里 でも四十年ですよ？何やってたんですか先生。

老婦人 さあ。

坂上 え、葉伊里ちゃんはいつから知里ちゃんと？

葉伊里 ああはい。三十年前に土堀製菓がとんでもない大赤字で倒産して。で、そのショックでお父様が急死して。

坂上 ああ、

葉伊里 そのショックでお婆さまも急死して。

坂上 ああ…、

葉伊里 それからは、お母様が外に出て、色々仕事をなさって、

老婦人 うん。魔法が解けたからね。

坂上 ああ。ティラパンナ・タデ・コッタミスは、全つ然流行らなかつたんですね…。

老婦人 うん。ちよつと惜しかつたけどね…。

坂上 ああ…、

葉伊里 それで無理が祟つて二十年前から心臓を患つて、十年前から在宅介護を受け始めて、二年前に私が介護に何うようになりました。

坂上 あ、え、なに？葉伊里ちゃん、介護士だったの？

葉伊里 はい成り立てだつたんですけど、あんなすぐに辞めました。だつて凄作家が居るつてお聞きしたので。

老婦人 私が付き人をお願いしたの。あの子一人じゃ何も出来ないから。

葉伊里 一本書き上げたらノーベル文学賞つて聞いたら、そりゃあ引き受けますよ。

老婦人 それから住み込みで色々とお世話になつて。編集者も見つけてもらつて。

葉伊里 はい。何でもしますよ。だつて出版されたら億万長者ですよ。

老婦人 ええそうよ。

葉伊里 もう全力でお手伝いしますよ。

老婦人 お陰で遂にねえ…ほんつと楽しみ！

葉伊里 はい！

坂上 あーでも…、何も書いたことがないんですよ。

老婦人 それが何。

知里、ドア2から勢いよく、追つて郁美と山路がやつて来る。老婦人は坂上の背後に隠れる。

老婦人は「頑張れ知里ちゃん」と書かれた内輪を掲げて、知里を見守る。

知里 ああああやめて、近寄らないで。（原稿用紙と鉛筆を持っている）

郁美 待つてほらほら、これ見て見て。（文庫本を知里に突きつける）

山路 郁美ちゃんもうやめてよ、

坂上 なに？どうしたの。

山路 いや知里ちゃんの筆が進まないから、参考について郁美ちゃんが本を、

葉伊里 ああもう駄目ですよ。先生はPTSDで本が触れないんです、読書が出来ないんです。

山路 え、そうなの？

老婦人 (坂上に対して頷く)

郁美 ほら読みな。 (本を知里に突きつける)

知里 うわあああー。

葉伊里 物語恐怖症です。

知里 やめろって言うてんだろ。 (と郁美の本を払い落ととして) ……そんなのいらから放っておいて。

郁美 むかーしむかし。

知里 ああああああ。

山路 こんな無理じゃん、絶対だめじゃん。

葉伊里 ギネスブックなら読めるんですけどね。

老婦人 (坂上に) お父さんたち居なくなつてから全巻揃えたのよ。

山路 (聞きつけて) え、全巻つて凄い数じゃないですか？

知里 何も読まなくなつて書けるんだよ私は。構想四十年の大作が。世界一の大作が。

郁美 ……。山路、それ持つて来て。

山路 え？なに？ え？ギネスを？全巻？

郁美 うん。ほら行きな。 (と山路の尻を蹴り葉伊里と坂上に) あんた案内して。あんたは夜食でも買ってきて。

山路と坂上と葉伊里、「なんで」「参考に」「なる？」など口々にドアへ去っていく。

郁美 さあその間に私が私の物語を語つてあげる。 (様子を变えて) ……あたしはザンビアのスラムで育つた…そこ

は昼でも薄暗く、男たちは、

知里 ……。 (無視して奥の箱椅子へ)

郁美 ちよつと、聞けよ。

知里 ……。 (箱椅子に座つて原稿用紙を広げる)

郁美 あ、何？行けんの？ (知里に駆け寄つて原稿用紙を覗き込む)

老婦人 (郁美の後ろから原稿用紙を覗き込む)

知里 ……。

郁美 行け。

映像イン。原稿用紙。知里の鉛筆が最初の一行を書く。

「母が死んだ。」

老婦人、大歓喜の声を上げてジャンプする。或いは「やった！知里ちゃんを書いた！」と飛び回る。ファンファーレ。そして声が聞こえてきて映像オフ。

(ちなみに「今日、ママンが死んだ」で始まるカミュの異邦人はノーベル文学賞を受賞。)

## 汚染

住民男性Ⅰ (声) やつと着いた…、

住民女性Ⅰ (声) ああもう駄目…、

郁美 あつちで続きを。 (と知里を立たせてドア2の方へ放る)

郁美と知里、追って老婦人もドア2へ去っていき、ドア1から住民男性1と住民女性1、息も絶え絶えにやって来る。「火葬場反対」「完全撤去」と書かれたプラカードを持っている。

住民男性 なんだあの人混みは、(と部屋に入り)

住民女性 工事だけでも混乱してるのに、(と部屋に入り)

住民男性 (咳き込んで) ああやつぱりここからだ、ここからも酷い匂いがする、

住民女性 えっ? ああほんとだ。(咳き込んで) なにこれ、耐えらんない。

住民男性 なんてみんな平気なんだ、

住民女性 ううん平気じゃないはず、きつとこの火葬場のせいでみんなおかしくなってる。

住民男性 ああ許せない。早く壊してしまおう。

住民女性 (ロールカーテンを差し) これじゃない? この向こうが、

住民男性 ああ。こんなものじゃ誤魔化せないぞ。(とロールカーテンを上げる)

住民女性 (露わになった火葬炉を見て) うううううっ…、

住民男性 (同じく) あああああっ…、

住民女性 (嘔気を催しつつ) ほらやつぱり、これが原因…、

住民男性 (嘔気を催しつつ) ああなんて気分が、悪いんだ…、

住民女性 (気が遠くなりつつ) 絶対出てるよ、有害物質が…、

住民男性 さあ早く粉々に壊してしまおう。道具を取ってくる。

住民女性 ああもう駄目、

住民男性 おい大丈夫か、しっかりしろ、

住民女性 絶対にここを壊して。そして役所に掛け合って公園に…、ハルトが遊べる公園に…、

住民男性 ああ勿論そうするよ、

住民女性 私がどうなっても…、

住民男性 どうもならない、どうもならないよ、

住民女性 ごめん、私もう…、(意識が遠のく)

住民男性 ほら立って。とりあえずここを出て(と火葬炉が目に入り) あああ…(そして箱椅子の後ろに嘔吐)

住民女性 ああどうして…せつかく買った家のすぐ近くにこんな…酷い…酷いよ…、

住民男性 大丈夫、俺が壊してやるから…(しかし立てず)

住民女性 お願いね…(気を失いかける)

住民男性 おい死んじゃ駄目だ、火葬は空気を汚染する…、

住民女性 じゃあ埋めて…近くの森に…、

住民男性 駄目だ…土葬は地面を汚染する、山も海も空も駄目だ…ハルトの体に有害物質が…、

住民女性 ……じゃあ、どうすればいいの?

住民男性 ……どうしよう?

そこに社員5と6、ドア1から話しながらやって来る。

社員5 例の業務員たちはまだここに?

社員6 だと思えます。追い出すんですか?

社員5 いやまず話を聞いてやらなきゃならん。そしてきちんと説明を…ん? どうした、誰だ。

社員6 (住民男女に) え、何? どうしたの?

住民男性 あ…あんだ達、汎愛社の…、

社員5 大丈夫ですか。

社員6 (落ちているプラカードに気づき) なにこれ、(とそれを拾って社員5に見せる)  
住民男性 この酷い公害を撒き散らす火葬場を…壊すんですよ…

社員5 いえ何度もご説明差し上げてるように、我が社の火葬炉は最新の再燃焼炉で噴煙を燃焼させているので、  
社員6 ええ。ですので煙や匂いや有害物質は、一切、排出していませんよ。

住民男性 じゃあ何で?! こんなに気分が悪いんですか?! (と勢いよく立つて詰め寄る)  
住民女性 そうですよ! おかしいじゃないですか! (と勢いよく立つて詰め寄る)

社員5 いやあの、

住民男性 現に今ほら、俺ここに、(と嘔吐した場所を指す)

社員6 ああやだ何これ、

住民男性 だから俺たち、あんたらのせいで死ぬんだよー! (と元気に飛び回り) 死ぬんだよー!

住民女性 あああ急がなきゃ。どこで死のう? どこにする? (とドア1へ)

住民男性 崖? ドブ? (とドア1へ) あ、商店街?

住民男女、口々に何やら言いながらドア1へと去っていく。

そして社員5と6が残される。

社員5 何なんだ…。(そして電話が鳴る)

社員6 (電話をとり) はい。あなたの近くのホットテストステーション・KASOです。ああはい。ああいえ。こちらの  
お電話がしばらく繋がりにくくなっていたようで。はい。大変申し訳ございませんでした。え? あはい…、  
社員5 どうしました? 何の電話?

社員6 この火葬場からの煙と匂いが酷いと。健康被害が出ていると。

社員5 ああ…しっかりご説明差し上げてください…。(箱椅子に座る)

社員6 (電話に) お聞きください。ええ。こちらの建物にはほら、煙突や排気口などは一切ございませんでしよ?  
ええそうなんです。噴煙の類は全てしっかりと内部だけで、処理をしておりますので。ええそうなんです。  
全て内部だけで、処理をして。はい外には一切…、

社員5 どう? ご納得いただけましたか?

社員6 いえ駄目です。絶対に許さないと。

社員5 じゃあ後で直接伺ってご説明するから。お住まいはどちら? (とメモ帳を出し)

社員6 (電話に) ではよろしければ支部長がこれから伺いますのでご住所を…、え? サンティアゴ?  
社員5 ?

社員6 失礼ですがどちらのサンティアゴで…あはい、あはい、チリの中央部に位置する都市の。あはい…(社員5  
に) エガーニヤ広場をオッサ通りからライン通りへ左折したところからお掛けだそうです。

社員5 んん?

社員6 失礼ですがあなたその、サンティアゴからお電話なさってるんですか? ええライン通りの。あはい。そち  
らにここからの煙が?

社員5 そんなわけじゃないでしょう。

社員6 いえそんなわけがないと思うのですが。ええだつて…あはい、あはい、あはい、ええつ? (社員5に) サン  
ティアゴ近くのラス・コンデスは、噴煙被害で壊滅状態だそうです。

社員5 なに?

社員6 エル・プロモ山の麓にある町です。噴煙で陽の光が届かなくなつて、有害物質で住民の肺や目が潰れている  
そうです。

社員5 (受話器を社員6から奪って) いや失礼ですがあなた本当にサンティアゴからお掛けですか? もしそうだと  
したらその噴煙はうちじゃなくてその近くの…あはい、あはい、あはい…、ええつ??

社員6 何ですつて??

社員 5 (社員6に) UNEPの調査で間違いなくここからの噴煙と判明したと。いま国連による強制措置が検討されていると。  
社員 6 えっ、なんですかそれ。  
社員 5 世界的な公害問題です！このままでは国際問題に発展しかねない…。  
社員 6 えっ、なんで…？ (と火葬炉を見る)  
社員 5 (電話に) あの、追って本社からご連絡差し上げますので、はい。(社員6に) おい本社に戻るぞ。  
社員 6 あっ、では業務員たちは…、  
社員 5 そんなものはどうでもいい！！行くぞ。  
社員 6 あはい。

社員 5 と6がドア1へ去っていくと同時に、  
知里と岡部、ドア2からやって来る。岡部はプリンを食べながら。

(ちなみにサンティアゴはインカ帝国の首都クスコの近く。インカの死生観は死後も変わらず「死後の生」が続くというもの。)

## 配管

知里 いいから一人にして。もうちょっとで凄いのがブリッと出るんだから。  
岡部 ねえ一気に最後まで書こうとしないでさ。まずは小出しでいいんじゃない？  
知里 駄目だよ大作なんだから！チビチビ出してる場合じゃないんだよ！  
岡部 でも一気に出したらなんかほら、ビリッと裂けちゃうよ。とりあえずあつちでお茶でも飲んで放っておいて。(箱椅子にしゃがんで力む) あー…、  
岡部 下剤も入れといたからさ。

そこにドア1から山路と葉伊里、やって来る。

山路 ただいま。行って来たよ。あれ？ (岡部に) 郁美ちゃんとお母様は…、  
岡部 ああ知里ちゃんの筆が進まないから郁美ちゃんが自分の物語を語りだして。今あつちでなんか夢中だよ。ええ？何それ…？  
山路 ほら山路がギネスブック持ってきたよ。とりあえずそこからヒントを、  
岡部 いや。それがなかったんだ。  
山路 え？  
岡部 ああそれどころか…、  
山路 家がなかったんです…。  
知里 ……………は？  
葉伊里 前から言ってたじゃないですか。固定資産税払えてないって。催告書(さいこくしょ)が来てるって。  
知里 ああ…、  
岡部 そうなの？  
葉伊里 はい、  
山路 (住民男性の吐瀉物を踏んづけて) わ、何これ。  
葉伊里 二十年前にお母様が倒れてから支払いが滞りだして、十年前からはもう…、  
岡部 ああ…、  
葉伊里 私が何うようになった頃にはもう、減免も間に合わない状態で…、  
山路 (バケツと雑巾を持ってくる)

岡部　でも役所に相談するとかそういうのって、  
葉伊里　滞納期間がもうあれだったんで、手の施しようがなくて。

岡部　ああ、

知里　（山路だけに）そこんところにも飛んでる。

葉伊里　だから何とか分割払いやら任意売却やら出来ないか奔走してたんですけど、  
岡部　うん、

山路　（知里だけに）ああそこさつき拭いたから。

葉伊里　でもお母様が亡くなられてバタバタしている内に、差し押さえです。競売に掛けられたみたいですよ…。

知里　（雑巾掛けに集中する）

岡部　あー…、それで売れちゃったんだ…。（目の前を掃除する知里の姿が目に入る）

葉伊里　もつと早く対策を講じれば何とかなかったのに…：十年間も何もなかったせいで…（目の前を掃除する知里の姿が目に入る）…：ちよつと先生、何してんですか。

知里　え？

葉伊里　先生の話してんですよ？

知里　ああそう？（掃除を続ける）

岡部　で、いくらで売れたの？

葉伊里　え？

岡部　土地込みでしょ？

葉伊里　あー…：諸々の返済でもうなんにも残ってませんよ。先生。聞いてます？聞こえますか？！

知里　何だようるさいな！（と雑巾を葉伊里に投げつける）

葉伊里　うわっ…、

岡部　ねえ何でなんにもしなかったのさ。そんな時お母さん心臓悪くしてたんでしょ？

葉伊里　（吐き気を催しつつ）お母様は自分で病院行って、仕事出来なくなるまで働いて、でも無理が祟って、  
岡部　うわあ。なのにずっと引き篋もつてたの？なにそれ、なんで？信じらんない。

知里　（山路の雑巾を奪って岡部に投げつける）

岡部　あつちよつ、

知里　あんたらのせいだよ！あんたらが私のことを。私のことを。（と山路にバケツの中身をかける）

山路　ああちよつとなに？あーあの、あれだよね？郁美ちゃんが無くした給食費の、

岡部　あああれ俺べつに、疑つたりとかしてなかったと思っただけどなあ。

山路　ああうん、多分そんなに気にしてなかったよ。そんなことあつたかなーつてくらいだよ。

知里　はいはいはいはいあんたらはね、そうでしょうよ！でも私はあれのせいで引き篋もりだよ。ずっとまるで生きてる気がしなかったんだよ。…：だからこれからだね。これからはこれで（原稿用紙）生きてくんだよ。私はあんたらと違って、ぜんっぜん、死んでなんかないんだからねー。

岡部　あーいやそれは、

山路　あのさ、みんなあそこに居たじゃない？だからさ。ほら、ねえ、

知里　（箱椅子に置かれた岡部のプリンをとり）で？夜食はどこまで買いに行ったの？サミット？ピーコック？

岡部　ああ私カニが食べたいなあ、たらば蟹。  
ちよつと知里ちゃん。現実見てよ。

知里　あ。プリンに醤油かけたらカニになるんだっけ？（とプリンを食べながら）  
岡部　ウニだよ。それ俺んだよ。

そこに郁美、ドア2から戻ってくる。

郁美 あー語った語った。  
山路 あ、終わったの？ 物語。

郁美 うん。ザンビアのスラムから抜け出してヨハネスブルクのギャング団でのし上がって、鉱山手に入れて大富豪。ハッピーエンド。

知里 それバクつていい？

郁美 は？

知里 いいじゃんそれ。そのまま書くよ。それかテキストならノベとかない？ ウケの良さそうなの。

葉伊里 いやいやそれじゃ駄目なんじゃないですかね。

知里 なんです。

葉伊里 だって。

知里 (笑って) どうせあれだよ、私には無理なんだよ。だって全然、生きて来なかったんだから。何の物語もない人生だったよ。郁美みたいな壮大な物語なんて私にはまるで無いんだよ。

山路 でもこれ嘘だよ。

知里 もう何にもないまま終わっちゃったんだよ。始まってもいないのに、もう終わっちゃったんだよー！(と、唐突にプリンを投げつけ、雑巾を投げつけ、バケツを被り振り回すなど、無闇に暴れる)

岡部 ああああ、なんだよもう、

知里は暴れ続け、山路と岡部は散乱したものを拾う。

郁美 まあまあ知里ちゃん落ち着いて。

知里 放っておいて。

郁美 うんそうだね、放っておくよ。

知里 もういいんだよ。

郁美 うんそうだね。もういいね。

知里 ごめん、私には無理だ。

郁美 うんそうだね。じゃあもうぜんぶ諦めよう。

知里 うん。

葉伊里 え、ちょっと待って郁美さん、何言ってるんですか、

山路と岡部、郁美の言動を解せぬまま、バケツや雑巾を片しにドア2へ去っていく。

郁美 ああ大丈夫。書こう書こうと思っているうちはね、絶対に書けないから。書こうなんて微塵も思っていない時にこそふいにね、書けるから。

葉伊里 あー…、

郁美 急にね。一気にね。千ページや二千ページくらいパーっと書けるよ。書いたことにも気づかないよ。無意識だから。

葉伊里 はあ、

知里 ……。

郁美 (唐突に知里の頬を平手打ちし) 駄目だって思っちゃ。

知里 あうん。

郁美 (知里の頬を平手打ちし) 駄目だってば。忘れて。集中して忘れて。……。 (そしてまた平手打ち)

葉伊里 あの、

郁美 (平手打ち)

葉伊里 郁美さん、何か別のこととして忘れませんか？

郁美 (平手打ち)

葉伊里 ねえちよつと、

知里 静かに！集中させてー！

葉伊里 ……。

そして無音の長めの間。するとほんの小さく、機械の鈍い稼働音が聞こえてくる。

葉伊里 ……何ですか、この音。

知里 (葉伊里に) あああもおおー！

郁美 (葉伊里に舌打ちし) あつちで集中しよう。(と知里の手を引きドア2へ)

葉伊里 ……。

二人が去ると小谷のかけら、ドア1から上等なスーツ姿でアタッシュケースを持ってやって来る。

かけら あ、どうも。失礼します。

葉伊里 ……あ。ご予約ですか受取りですか？

かけら ああいえ。わたくし小谷のかけらです。

葉伊里 かけら？

かけら ええ。先程こちらに戻って来たんですけど、それから本社の方で色々、勉強をさせて頂きました。

葉伊里 はあ。

あなた新人さん？どうぞよろしくお願いします。わたくしその後、技術管理、情報管理、財務管理、危機管理などのスキルを全て身に付けさせて頂きました。この度急ぎよ、国際危機管理部の統括部長に任命されました。

葉伊里 はあ…なんか凄いですね、

かけら ああ、それはもう幅広い知見が身についておりますので。なのでトントン拍子の出世です。

葉伊里 そうですか…。

かけら あ。こちらのフルオートメーション火葬、ずっと稼働しっぱなしですよ。

葉伊里 え？

かけら いやほら、この建物の裏手がベルトコンベアで、病院や病院併設の介護施設なんかと繋がってますでしょ？

葉伊里 え、何ですかそれ。

かけら こちらでは全自動で納棺と出棺を行なっているんですよ。休みなく。(火葬炉を指す)

葉伊里 あ…そうだったんですか？(火葬炉を見る)

かけら はい。多分そのせいなんですよね。排気配管と再燃焼炉で異状が起きているみたいなんです。

葉伊里 異状が？

かけら 恐らく。(そしてアタッシュケースからスパナを取り出し)なのでまずは直接、調査をさせて頂きますね。

葉伊里 ああはい。

かけら 失礼します。(とドア3へ入っていく)

葉伊里 ……。

かけら (声) (配管を叩く音がして) ……あー。詰まっていますね。この配管全部が。

葉伊里 え？

かけら (声) 完全に詰まっています。ああこれは酷い。こちらで火葬された方々の物語がびっしりとこびり付いています。

葉伊里 ……はい？

かけら（声） ああ大量です。大勢のご高齢者の方々の、物語です。

葉伊里 物語？（配管を見上げる）

かけら（声） これはちょっとやさそつとじゃ…、

そして配管を叩く音が激しくなると、重々しく不穏な音がし始める。

葉伊里 ……ん？？あの、ちょっと、

かけら（声） あつ、（照明が後ろ、だけに染まる）

一瞬の間の後、シューッ！という噴射音で、火葬炉が眩く光る。見上げる葉伊里。

かけら「あー……っ」と声を上げて完全暗転。音楽インして、ニュースが聞こえてくる。

ニュース声 「只今、滝壺区飛泉町の火葬場で、噴煙が上がりました。繰り返します。

先日爆発事故を起こした滝壺区飛泉町の火葬場で、再び噴煙が上がりました。

この煙は色とりどりに噴き上がっており、火葬場周辺の道路工事現場に降り注いでいます。

そのまた周辺には、土堀知里さんのファンの方々が集まっておりますが、

煙を見上げた彼らの間に、響めきが起こっています。」

## Film 煙

映像イン。噴煙を見上げて響めくファンたち。

「なんだ？」「どうしたんだ？」「あれは何なんだ？」など。

そして工事現場で噴煙に戸惑う警備員の佐藤。そこは色とりどりの煙に包まれている。音楽は六十年代らしい音楽。佐藤の周りを、六十年代が青春時代の人々、青春時代の姿で、往来する。

ミニスカートの女、アイビーの男、学生運動の男、スーツに帽子の男、任侠の男、サイケな女。

そのなかで、アイビーの男が佐藤の肩を叩く。佐藤、その顔を見て驚き感嘆。抱き合う二人。人々、その周りで笑顔で踊り出す。ドスを振り回す、ゲバ棒を振り回す。

（煙を噴き上げる「Hottest Station KASO」店舗。その周囲の地面に、大穴が空いている。）

ニュース声 「一方、この道路工事で道路の掘削が進み、地中深くに達したことにより、

火葬場の地下に空洞が出来ていることが分かりました。

その空洞は火葬場の地下深くに続いています。どこまでの深さがあるのかは確認出来ないようです。」

穴を辿ると、サンティアゴ。遠くの高層ビル。貧しいスラム街。その空は燻んで、街が黒い噴煙に包まれている。

その燻んだスラム街で起きる、強盗、暴動、街に火を放つ等の、惨状。（※実際の画像を編集）

再び穴を辿って戻ると、夜の店舗周辺。色とりどりの煙がケバケバしくライトアップされ、

浮かれる佐藤と六十年代の人々。ますます盛り上がっていく。

肩を組んで歌を歌っていたり、酒を飲み交わしていたり。

## 排出

映像同様にカラフルに明転。映像の音楽は外から聞こえる音量になって続く。

そこに奥さん、ドア1からパンとプリンを箱を持ってやって来る。エプロンは無し。

奥さん あーやっと着いた。あなたーパン焼いてきた。あとまた差し入れー。(とパンとプリンを箱椅子に置いて、ドア2に) ねえ今日も帰らないのー？ 私そろそろバスの時間だからー、(ドア1を振り返り) さっきの煙は大丈夫だったの？ そのせいなんでしょー？ もう沢山のご老人方の、人生の物語がそこらじゅうに…、

そこにドア1から大山のぶ代、やって来る。特徴的な髪型と口紅と表情と声。台本を持っている。

奥さん ん…？

大山 (台本を読む) 「初めまして、のび太くん」 「初めまして、のび太くん」

奥さん ああ！ 第一話の？ 第一話の収録に臨む、大山さん…？！

大山 なにか？

奥さん あ、でも大山さん亡くなったの、確か去年ですよ。

大山 ああなんか配管は取り変えてないみたいで。私ずっとそこにこびり付いてたの。(配管を指す)

奥さん ああ…。(配管を見上げる)

大山 じゃ。忙しいので。(台本を読みつつドア1へ引き返していく) 「初めまして、

奥さん あ、待って。大事なときにすみません。お願いします一回だけ。何か出してみてください。

大山 何をです…？

奥さん ほらこう、(お腹のポケットから何か出す仕草をして) ね？ 何でもいいので一回だけ、

大山 (台本を捲ってみる。ひみつ道具を出す時のファンファーレが鳴る)

(奥さんは期待し、大山は台本を閉じ)

大山 のーぶー代ー。

同時にドア1が開いて、もう一人、大山のぶ代が笑顔で現れる。

奥さん …え。なんで…、

大山 じゃ。(と台本を見ながらドア1へ。もう一人の大山も、笑顔で会釈をしてドア1へ)

大山らとすれ違って、知里、プチプチを潰しながらドア2からやって来る。

知里 ……。

奥さん ああ、私、山路の。(と頭を下げてからプリンを指し) あれ差し入れです。皆さんで召し上がってください。

知里 夜食が来るまでの間、今ちよつとみんな、仮眠してるので。(そしてまたプチプチを潰し始める)

奥さん ああそうなんですか。…あ。私ちよつともう、時間ないんで、

知里 ……。(そのまま舞台端の箱椅子へ)

奥さん ……じゃよろしくお願いします。(とドア1へ急ぐ)

するとドア1から六十年代ミニスカートの女1(十八歳)、リズムに乗ってノリ良くやって来る。

知里は舞台端の箱椅子でプチプチを潰し続ける。

女1 へい。浮かない顔してどうしたの？

奥さん ああなに？ また物語の？

女1 シケたツラしてないでさ、あたしと一緒に行かない？あたしシスコでファッションデザイナーになるんだ。  
(知里の周りで踊る) ツヘイ、ツヘイ、  
奥さん すいません、私…、(ドア1へ向かう)  
女2 何言ってるのよ。あんた英語喋れないでしょう。

ドア1から六十年代のスーツに腕カバの女2(二十二歳)、毅然とやって来る。  
大きな電卓を持っている。

女1 そんなのフィーリングでなんとかなるよ。  
女2 どうせアメリカまで行く旅費さえないわ。  
奥さん (ドア1の前に立つ女2に) あの、ちょっと、  
女1 (バックから拳銃を出し上に向かって発砲)  
奥さん !

女1 ハイジャックをするんだよ。ケイタが計画立てたんだ。フリーゲーム！  
女2 何言ってるの。バカな男とツルんで現実を見て。これからはこの社会で戦ってかなきゃ。私は女サラリーガールとして働くわ。  
女1 はん、シラケるね。(と奥さんを連れて箱椅子へ)  
女2 お茶汲みや腰掛けじゃないのよ。バカにすんなってのよ。見て、この電卓捌き。(と電卓の早打ちを奥さんに見せつける)

奥さん (知里に) あ、あの、助けてください。ねえ、  
知里 ……。(奥さんらを見てはいるが何もせず)  
女2 男どもなんかチョイチョイのチョイとイナしてやるのよ、女だつて出世出来るつてとこ、見せてやるのよ！  
奥さん あー！(と立ち上がって吠える)  
奥さん ああはい、そうですね…、  
女3 ええなあ、うちも東京行きてえ。あんな田舎出て行きてえよ…。

ドア1からセーラー服の女学生、女3(十六歳)、やって来る。学生鞆を持っている。

女1 なによ、出ればいいじゃん。そんで世界を見るんだよ。  
女3 けど親が許してくれん。地元で嫁げ言われてる。好きでもねえ男の所へ嫁がされる。  
女2 何言ってるの、そんなの無視よ、あなたこれから自立した女になるのよ。  
女3 けど、したら家出するしかねえ。捕まったらばっけえ酷い折檻受けるか…殺されるかもしれん…。  
女1 そんな。尚更逃げなきゃダメだつて。人生一度きりなんだから。  
女2 ええ。誰にも指図される筋合いはないわ。あなたの人生なのよ。  
奥さん そうよ！そんな所にいたら駄目。何ならウチに来てもいいから！  
女3 そうか。…ありがとの。そうだよ。…うち、家を出る！  
三人 (歓声。女1は奥さんを立たせて踊り出す)  
女1 (踊りつつ奥さんに) あんたあたしと組まない？ひとつ大きな事やらかさうよ。  
奥さん (踊りつつ女1に) いいですね。やらかしましょう！

四人、そうして盛り上がっていると、ドア1から花柄カーディガン姿の女3(二十四歳)、赤子を抱いてやって来る。そしてほくそ笑んで四人を眺める。  
それに気づく四人。音楽カットアウト。

女1 ……なによ。

女4 ううん何でもないの。みんな可愛いなっと思って。(別の音楽イン。少し時代が進む)

女1 は？

女4 今の内よ、好きにやればいいわ。どの道みーんな家庭に入るんだからさ。

女2 は？何言ってるの。あたしは仕事に生きるわ。

女1 あたしはデザイナーに。

女3 うちも結婚なんてせん。

奥さん ううん。仕事も家庭も、両立出来るわよ！

女4 だからやれるだけやってみればいいっしょ。平凡な毎日を充実させることこそ大事だって、みんなその内、気づくから。

四人 (ざわつく)

女4 一日も怠けずに家事を完璧にこなして、旦那様のお仕事をほんのちよっぴり手伝って。毎日のお買い物やり練りが唯一のお楽しみよん。

四人 (それぞれにリアクション)

女4 旦那様のたまのお休みにはファミリーカーでデパートへ。そんな家族サービスマンがあればもう、最っ高！  
奥さん そんな人生、まっぴら御免よー！

一斉にそれぞれ自分の主張を始め、口喧嘩になる。

知里は心ここに在らずのまま、それを見るときも無しに見ている。

そこに郵便局員、ドアからやって来る。

郵便局員1 すいませーん。すいませーん！(音楽カットアウト)

五人 (静まって郵便局員を見る)

郵便局員1 あ。お荷物が届いてます。プリン五十年分です。

奥さん え、なにそれ？

郵便教員1 いやどなたか懸賞に応募されてますよね？(伝票を見て)「シールを集めて素早くゲット。幸せのプリンプリン一生分プレゼント」

知里 ああ私が。

奥さん え、そうなの？

郵便局員1 ちよつと量が多いんで、今そのオモテに置いてあるんですが、

知里 ああそこがいいです。あとで山路に運ばせますんで。

奥さん (知里を見る)

郵便局員1 ではこちらにサインをお願いします。(伝票を見て)えーつと、土堀さま。

知里・女4 (同時に)はい。

奥さん ……ん？

郵便局員1 ああえーつと、(伝票を見て)土堀知里さまですね。

女4 ああ私は知恵。

女3 私も知恵。

女1 私も知恵。

女2 私も知恵。

知里 なに？

女3 うん。片山知恵、十六歳。

女1 片山知恵、十八歳。  
女2 片山知恵、二十二歳。  
女4 土堀知恵、二十四歳。旧姓、片山です。  
知里 え……？  
女4 で。この子は千九百七十五年二月三日生まれの知里ちゃん。魚座のB型、Rhマイナス。  
知里 えっ……、お母さん？  
奥さん え？なに？  
知里 ……、（四人を見る）  
奥さん え？これ全部？これ全部が、お母様……？  
女1達 （知里に笑顔を向ける）  
知里 いや誰も全く、面影ないんですけど！  
女4 そんなもんですよ。  
女1 さ、こんなところでウダウダしてらんないよ。  
女2 プリン一個もらつてくね。  
女3 ありがとの。

ステップを踏みながら、尻と尻をぶつけ合いながら、楽しげに去っていく三人。

女4 （そんな三人を見送りつつ）…もう、この子が産まれて観念したわよ。ああいう将来の夢とか自分の自由とか、そんなの全部、捨てたものはあ。  
奥さん  
女4 だからこの子にはね、自分の好きな事を自分の好きなように、やっていつて欲しいのよ。そのためなら何だつてするわ、ええいくらでも。（ドスを効かせて赤子に）…もう死んだつて構わないのよ…。  
知里 ……。（読めない表情になる）  
女4 じゃ、プリンちよつとだけもらつてくわね。さようなら。（そしてドスを効かせて赤子に歌いかけ、ドア1へ向かう）おどまぼんざり盆ざり盆からさきやおらんと…

「五木の子守唄」を歌いながら、女4、ドア1へ去っていく。少しの間。

郵便局員1 （知里に）あの…すいません、サインを貰えますか。  
奥さん （知里に）あなた大丈夫？…ねえ。…ちよつと。

### 無意識

そこに茶色い全身タイツで頭に葉っぱ、両手に枝と葉っぱを持った老婦人、自分なりにこつそりとドア2からやつて来る。

郵便局員1 （老婦人を見ながら）サインを貰えたら私は…、  
奥さん （老婦人を見ながら）私ももう行きますから…、  
知里 （読めない表情のまま）私、お母さんの物語を書こうかな…。  
老婦人 （驚き唐突に笑つて）無理無理あんたなんか書けっこない。  
知里 （老婦人を見る）  
老婦人 結構すごい人生だったのよ。  
知里 なんだ、木か。

郵便局員1・奥さん（知里に対して驚く）  
知里  
（箱椅子に座る）

郵便局員1（奥さんに）じゃ代わりにいいですか、  
奥さん（何のことか分からず）え…、

郵便局員1（老婦人に）こちらなんですけどね、ここに、（と伝票を差し出し）  
老婦人（サインをしながら）だからほら、あなたの話を書いてよ。それが世界で一番、素晴らしい物語なのよ。  
知里（無視）

奥さん（知里に）ねえちょっと、なんか大事っぽいこと言ってる。

知里 何言ってるんですか、木ですよ？

老婦人 木なのよ。（とサインを終えた伝票を郵便局員に渡す）

郵便局員1（伝票を見て）あ、「木」って書いたら、駄目ですよこれじゃ、

知里 ……。 （再びプチプチを潰すのに没頭）

老婦人（知里に）ああそうだ。さつき坂上さんから連絡があつたの。今、新鮮なたらば蟹を買いに、福井の市場まで行ってるって。

奥さん 福井？

老婦人 ええなんとなくね、この子が食べたがつてるんじゃないかなーって思ったんだって。そしたら福井に居たんだって。

郵便局員1 なんとなく？

老婦人 ええ。

奥さん それで福井まで？

老婦人 ええ。多分無意識ね。

郵便局員1 無意識？

老婦人（知里に）ほらさつきだつてあなたの好きなプリン、いつの間にかに増えたんでしょ？（奥さんに）あなたの差し入れのプリンがね、増えたのよ。

奥さん えっ、そうなんですか？

老婦人 ええ。

奥さん 私が無意識に持ってきたプリンが…、

老婦人 そうなのよ。その後もみんなが無意識に。そりやもうどんどん、

奥さん ああ！この人もほら、新しいプチプチをこうして、持ってきてくれる！（と郵便局員のポケットからプチプチを出して知里に見せる。知里は無視）

郵便局員1 いやこれは配達の時、

奥さん 無意識よ。

郵便局員1 無意識ですか？

奥さん あなたもいい人なのね。

郵便局員1 ああいやそれほどでも。（照れる）

老婦人 ええみんなとつてもいい人。キッカケを与えてくれたり、奮起をさせてくれたり。それがなかったらこの子、なーんにもしないもの。

奥さん へえそうなんだ。みんながあなたのためにねえ。

老婦人 無意識にだけどね。だからほら、（知里に近づいて低い声で）…あなたもつと、無心になりなさい。

知里 ……。 あー…！！（ずつとプチプチに没頭していたが、唐突に激しくもんどり打って、のたうち回る）

奥さん えっ、やだちよつとどうしたの、

知里 あああああああ…。（と、ひとしきりもんどり打ち、そしてスタスタとドア2へ向かう）……………。

奥さん なに？大丈夫？ねえ…、

知里  
……。(そのまま去っていくと思いきや、箱椅子の上のプリンプリンの箱とパンを唐突に抱え、奪とられないよ  
う警戒しながら、ドア2へと去っていく)

## 排除

奥さん  
……ああそうだ。私急いでるんだった。じゃ失礼します、(とドア1へ)  
郵便局員1  
あはい、

奥さんがドア1を開けると同時に社員4がやって来て、「あ、ちよつ」「すみません」「どうも」  
などと地味にわちゃつとして奥さんが去り、社員4が部屋に。

社員4  
あああなた、ご高齢のご婦人を見かけませんでした？ 凄くすばしっこくて、鼠ねずみのような。  
郵便局員1  
いや、木のような方なら、

老婦人  
(木のふりをする)

社員4  
そう……？(いぶかしむ)

老婦人  
(木のふりのままドア1へ去っていく)

郵便局員1  
……。

すると唐突に激しい空爆音。地面と照明が激しく揺れる。老婦人の木の枝がドア1から飛んでくる。  
えっ？となりつつも思わず箱椅子に隠れ、耳を塞ぐ二人。やがて空爆は治まり、静まる。

社員4  
……なんなの？

郵便局員1  
……さあ、

社員2  
(ドア1からやって来る)……あ、副部長、まだこちらに居たんですか？

社員4  
なに今の、また道路の崩落？

社員2  
いえ今のは我が社が。

ドア1からかけらと社員2、悠々とやって来る。  
かけらは高級なスーツに、派手な色のネクタイ。

かけら  
ああ。その節はどうも。

社員4  
え？ああ……小谷、くん……？

かけら  
ああええ。わたくしあのと国際危機管理部の統括部長に任命されたんですが、先ほど再び散り散りにな  
りまして。

社員2  
はい。前より更に散り散りに。素粒子の状態にまでなつたそうです。

社員4  
え、

そこで、上空に嘖げんき上がった多くの方の人生の物語や、それに纏わる知識や知見の全てを、吸収しまし  
た。

はい。更には広く飛び交うあらゆる周波数の電波から、得られるだけの全ての情報も吸収したそうです。

ああ……そうなの……？

そこでわたくしこの度、汎愛社の最高責任者に選ばれました。

社員4  
え……？

社員2  
これで我が社は安泰です。

社員4  
はあ……。

郵便局員1 …あの、今の爆音は、  
かけら はい？

社員2 ああ何でもご質問ください。膨大な情報量をお持ちです。  
郵便局員1 ああはい、（かけらに）あの爆音は何だったんですか？

かけら 「いい質問ですね！ 先ほどこの外から聞こえた爆音のことをお聞きですね？ それは汎愛社がこの周辺の混乱を鎮めるために、物語の残骸や集まった人々に向けておこなった、空爆の音です。」

社員4 えっ、空爆しちゃったんですか。

社員2 ええ。最高責任者のご判断によるものです。

社員4 どうしてそんな、

かけら 「なるほど！ いい着眼点ですね。何故ならこの火葬炉は問題を引き起こし続けています。中でも一番重大な問題は、火葬炉の底が完全に、抜け落ちてしまっている事です。」

社員4 底が、

社員2 はい。道路の崩壊もそのせいだったみたいです。

かけら 「そのため遠くサンティアゴ付近に非常に有害な噴煙被害をもたらし、国際問題になっています。」

社員4 え、そうなの？

社員2 はい。気候変動による健康被害に農作物の不作、また貧富の差の拡大と治安の悪化が酷いです。

社員4 へえ…（と火葬炉を見る）

かけら 「そのため先程、その抗議のためにグレタ・トゥーンベリさんが多くの賛同者を率いて船出をしました。彼女は総勢五十隻の船を率いて現在こちらに

郵便局員1 （遮って）え、それ本当ですか？

社員2 ああ間違った情報も多いです。

郵便局員1 ああ…、

かけら 「なのでとにかくこの火葬炉を、火葬場諸共、埋めちゃえばいいんだ。」

社員2 そういうことです。

社員4 え。

かけら 「解雇されたにも関わらずここに残っている業務員たちも一緒に埋めれば、問題は全て、解決です。」（とドア2を指す）

郵便局員1 え…、（ドア2を見る）

社員4 あ…、なるほど。

郵便局員1 え。

社員2 ということで、これからこちらに大型重機が入るので、

田中 おやめください！

ドア1から田中、やって来る。「Viva土堀先生」「頑張れ土堀」などと書かれた、

ハチマキ、タスキ、ウチワ、Tシャツなどを身につけており、空爆のせいで服が焦げ、乱れている。

社員4 何ですかあなた、

田中 ……ようやく知里ちゃんのお話が聞けるんです、あの子の書くお話が読めるんです！

社員2 あ…あなた確かこのバイトの…、

田中 もう辞めましたから、こんなとこ。（かけらに）あなた何なの？ さっきから勝手なことばかり言って…

（と掴みかかろうとする）

社員2 やめてください、ちよつと、

田中 放しなさい、あなた外の惨状を見たの？ 自分がこれから何をしようとしているのか、分かっているの？

社員 4 落ち着いてください、

田中 私、知里ちゃんのお話が聞きたいのよ、ずっと聞きたかったのよ。

社員 2 そろそろ重機が入ります、出ていってください。

田中 私は出ないわよ、断固阻止します。(と箱椅子に座り)ここを潰すなら私も潰しなさい。

社員 2 ちょっと何してんですか、(立たせようとしながら)

社員 4 馬鹿なことはやめてください、(立たせようとしながら)

田中 馬鹿なのはどっちですか、(そしてしばし二人と揉み合い、それを振り払って)あなたたちケツバットよ!

ピタツと静まる社員らとかけら。一斉に田中から離れ、驚愕の目で田中を見る。

田中 …ああごめんなさい。いや一緒に話し合いませんか? ほら、どうしてこんなことをするのか? ねえ……、

ひそひそ話をする田中以外。そこにゴゴゴと、低い大型重機の音が聞こえて来る。

社員 2 ああ来ました。重機です。

かけら では、話し合いなら本社で。

社員 4 (田中をドア1へ促す)

田中 いいえそれは、(と箱椅子から立ち上がらず)

かけら 行きましょう。

田中 でも、

郵便局員 1 ああそう待ってください。その前に、どなたかサインをいただけませんか。

全員 ……?(振り返る)

郵便局員 1 ほらここに。(と伝票を差し示す)

社員 4 なに?

郵便局員 1 お荷物が届いたんですよ、こちらに。なのでサインを。そしたら私は、

社員 2 いや今はそれどころじゃないんで。

かけら それに二十四年の十月以降は郵便局でも荷物の受け取りサインは全て不要になりましたので。

社員 4 ああそれじゃ。さ行きましょう。(と再び田中を立たせようとする)

郵便局員 1 いや待ってください。……そうだったかなあ。

郵便局員 2 (ドア1から)ああ書留や本人限定受取郵便の場合には勿論必要だけど、(無意識に社員らを押し返す)

郵便局員 3 (ドア1から)大型荷物の場合はどうだったっけ。(無意識に社員らを押し返す)

と、社員らを押し返す形で、郵便局員らがやって来る。重機の音は近づいて来る。

郵便局員 1 しかもこれ、懸賞の賞品なんですよ。(無意識に箱椅子に座る)

郵便局員 2 ではやはり要りますかねえ。(無意識に箱椅子に座る)

社員 4 ああちょっと、座らないで。出ていってください!

社員 2 ああもう重機が、

郵便局員 1 品物はプリンなんですがねー。(無意識に社員2を阻止し)

社員 4 邪魔しないでください!

郵便局員 2 邪魔なんかしてませんよー。(無意識に社員4を阻止し)

かけら もう力づくで退かしてください!

音楽イン。サインを求める郵便局員らと、それを退かそうとするかけらと社員らの動きが、唐突にダンス的な動き変わる。

田中 ああ助かった……！（と言ってドアの向こうに）ストップストップ！止まりなさい！

すると重機の音は消え、音楽が大きくなり、しばし激しいダンス。  
ダンスの最後は社員らが逃げていく形になり、それを郵便局員が追う。

郵便局員1 サインをくださいよー。

全員去って、そのまま映像へ。

## Film 黒煙

周辺が焼け野原となった火葬場の様子。煙があがっており、無人の重機がいくつか放置されている。そこからニュース映像に。音楽はサンバに変わっていく。

（汎愛社ビル。テロップと共に。）

ニュース声 「国際規模の噴煙被害を出した汎愛社ですが、問題の火葬場を埋めて隠蔽を謀ろうとしたことが判明し、厚生労働省と警察が調査に入りました。

その調査の結果、皆さんの設備管理と劣悪な労働環境、及び過酷な長時間労働などの実態が、明るみに出ました。  
これまで内部だけで処理されていた、過労死や事故死につきましても、再調査されるとのことでした。」

（田中のポートレート。）

ニュース声 「この問題は、汎愛社の元アルバイトで、隠蔽の現場にも居合わせていた田中さんの告発をキッカケに判明。（週刊誌の見出しと記事）

それを期に田中さんは、ニュース番組のコメンテーター（その様子）、バラエティ番組の御意見番として活躍し（その様子）、このたび俳優の角崎正吾さんとの婚約を発表しました。（その会見の様子）」

（サンティアゴの空が晴れていく様子。）

ニュース声 「尚、サンティアゴ側からの地盤工事によりラス・コンデスの噴煙被害は収束し、汎愛社は今後、国の支援を受けて経営再建に臨んでいくということです。

莫大な資金援助による事業計画によって、改めて経営革新に乗り出していくということです。（かけらと社員2、国のお偉いさんらしき男女と、満面の笑顔で握手。）」

（町の様子。灯りの消えた「Hottest Station KASO」の店舗。）

ニュース声 「その再建までの間、関東一帯の火葬はほぼ全面的にストップしています。

現在、稼働している火葬炉はほぼありません。  
火葬場に反対していた住民たちは安堵の声を上げ、平穏な毎日を取り戻したようです。」  
（自宅の庭で反対運動のハチマキを取って投げ捨て、安堵の様子の子の住民男性1と住民女性1）

(再び焼け野原。)

ニュース声「一方、問題を起こした火葬場の周辺は、地盤の崩れにより、未だ近づく事の出来ない状況です。

そこには現在バリケードが張られており、空爆された時のままの状態で放置されています。

主にはご高齢者の方々の人生の物語の残骸と、土堀知里さんの元に集まったファンの方々が、事故の時のまま、放置されているものと思われます。」

(折り重なって倒れている、前の映像の、六十年代の人々。知里のファンたち。)

(その焼け野原に建つ、「Hottest Station KASO」店舗。)

ニュース声「しかしながら、その一角に残った火葬場からは、未だ黒煙が上がっています。

汎愛社によると、そこにはもう誰も居ないとのことでした。

ですが昼夜を問わずに黒煙が、上がり続けています。」

(その建物から急ごしらえの煙突が伸びて、もくもくと黒煙が上がっている様子。)

今にも倒れそうな急ごしらえの煙突から、黒煙が勢いよく上がり、

黒煙は上空まで高く昇り、空を黒く覆い始める。

## 燃焼

唐突にドア1から、泥まみれの顔の知里が、肌色のボールを持って走り出る。

ボールをギュウギュウと丸めると、雄叫びをあげ、映像と同じサンバのリズムでドリブルを開始。

すると同じくドア1から、郁美と坂上が走り出てきて、それをディフェンス。

それをかわして、知里が火葬炉にボールをシュート。歓喜の声。舌打ちし悔しがる郁美と坂上。

知里はすぐにドア1に引き返し、郁美と坂上も追って去る。

知里はまた肌色のボールをドリブルしながらドア1から走り出て、

追って郁美と坂上、激しくディフェンス。そこに山路、ドア1から息を切らしてやって来る。

山路　　ちょっとちょっと、待ってよもう…、

審判　　(ドア2から走り出てきてホイッスルを吹き、音楽カットアウト。タイムのジェスチャー。)

山路　　えっ誰？

郁美　　なに山路。どうしたの。

坂上　　作戦タイム？

山路　　いや…、こんなにどんどん燃やさなくてもいいんじゃない？

知里　　だって外すごいでしょ。いくら燃やしても追っ付かない。(肌色ボールを山路に見せつける)

坂上　　それになんか、増えてるよね？

郁美　　うん、バリケードどこにどんどん、

知里　　ああ、どうやら他からも持ち込まれてるね…。

山路　　あー…今どこも火葬してないみたいだから…、

知里　　だからとにかく燃やさないよ。

審判　　(時計を見て前に進み出る)

郁美　　はいタイム終了。(構える)

知里・坂上(構える)

山路　　いやでも、ディフェンスする必要はないよね。(郁美の腕を取って)ちょっと、

知里　　ブロッキング！(山路に向かってブロッキングのジェスチャー)

山路  
審判

だから誰なんですか。  
(ホイッスルを吹く)

ホイッスルで、全員唐突にスローモーションになる。

ボールを知里から奪って、郁美、下手の方へ向かってドリブル。

郁美と坂上、追って知里、その場足踏みで、下手の方へ走るマイム。

立ち止まっている山路は、三人を眺めたまま、上手の方へ横移動。

つまりカメラが彼らを追っているような視点で見る状態に。

そのように、郁美らがその場足踏みで走り、山路が上手へ横移動していくと、

開いたままのドア2から、立ち止まっている岡部、同じく横移動で現れてくる。

プリンを食べながら三人を見ている。

もう少し移動するとドア2から、同じく三人を眺めている田中先生、横移動で少しだけ現れる。

坂上だけ、田中に気づく。

と同時に知里、郁美からボールを奪って、上手の方へドリブル開始。

郁美ら、今度は上手に向かって走るマイム。

田中と岡部、横移動でドア2へ戻って見えなくなっていく、山路、舞台中央まで戻って来る。

山路が元の位置に戻ったらスローモーション終わり、知里が火葬炉にシュート。

知里 (シュートを決めて勝利の雄叫び)

郁美 (地面を殴って悔しい雄叫び)

山路 だからなんで無駄に一回あっち行ったの。

坂上 今、田中先生いなかった？

山路 あのさ、この再燃焼炉、もう駄目になってるんだよ？

知里 それが何。

坂上 田中先生…？ (開いたままのドア2へ。入ったらドアを閉める)

山路 だからさ、あんな煙突じゃ駄目なんだって。燃やした煙がもう、そのまま排出されてんじゃん。

知里 でも外の惨状をあのままにしておくわけにはいかないでしょう。

山路 でもほら、きつと程なく本社がまたこの工事を、

知里 するわけない。

郁美 ここは埋めるか潰すかよ。

山路 でもこんなにじゃんじゃん燃やしたら、この辺一体の空気がさ、

郁美 空気が何。

山路 空気がほら、

知里 空気が何だよ。

山路 だからほら…なんかこう…、いやあ〜な感じになるよ？

知里・郁美 (ケツという感じ)

山路 それに有害物質も出てるしさ、

郁美 それはもうしょうがないよ。

知里 人間はそもそも、有害なんだよ。

郁美 ああみんな有害。出るべくして出る毒だよ。

そこにドア1から、坂上、続いて田中、やって来る。

三人 (田中を見て) ……。

坂上 先生、ずっと遠くからこつそり見てたんだって。

田中 だってここにはもう入れなくなってるから。(頬を膨らます)

郁美 あんなバリケードなんていくらでも突破できますけどね。

田中 (頬が縮む) ……。

山路 あああの、ありがとうございます。お陰さまで…、

田中 ああうんそれはいい。どういたしまして。

坂上 あああと、おめでとうございます。ご婚約…、

田中 ああうんそれもいい。ありがとうございます。

山路 ああそうだ、プリン食べていきませんか？ 大量にあり過ぎて…、

田中 ああうんそれもいい。それより知里ちゃん、書かないの。

知里 書きません。

郁美 書かない方が書けるんです。

知里 いいえ。もう本当に書きませんので。

郁美 え、そうなの？

知里 はい。断筆しました。なのでもう気にしないでください。

田中 ああ、そうなの……。

知里 そんなことよりとりあえず、この周辺の処理に忙しいので。(構える)

郁美・坂上(構える)

田中 …でも良かった。何だかすっかり仲良くなって。

知里 いえ。そういうわけではないです。

田中 え？

(審判に合図)

(ホイッスル)

再び音楽イン。知里はドア1に走るが、郁美と坂上がディフェンス。

無駄に激しく揉み合いながら、ドア1へ去っていく。

田中 …忙しそうね。

山路 ああまあ、

田中 ああ、私そろそろ打ち合わせに行かなきゃ。

山路 ああご婚約の、

田中 いえ次の都議会戦に、わたし出馬するから。

山路 ああ、

田中 じゃ。(ドア1へ走り去っていく)

## 浄化

同時に、葉伊里、ドア2から走り出てくる。

葉伊里 田中先生！ 田中先生！（と慌ててドア1へ走るが）ああっ…！ 駄目だもう見えない、

山路 え？

葉伊里 (ドア1の向こうを眺めて) もう砂埃しか見えません、

山路 ああ…膝は治ったのかな、

葉伊里 ああもう、  
山路 何か用事あった？  
葉伊里 いや前にもう断られたんです、あの人ひとりでも出来るから。  
山路 え？  
葉伊里 付き人はいらないうつて。何度もしつっこくお願いしても駄目でした。  
山路 ああそうなの…。  
葉伊里 もう私、どうすればいいんでしょう、  
山路 うん？  
葉伊里 帰るとこないんですよ、  
山路 ああ、住み込みだったんだっけ、  
葉伊里 先生、もうほんとに書かないんですかね？  
山路 ああまあ。書こうなんて微塵も思っていないね。  
葉伊里 ああ…、  
山路 まあしかしどうせあれだ。家なんかみんな無いから。  
葉伊里 え？  
山路 だつてずーっと帰る暇なんかなかったもの。  
葉伊里 ああ…、  
山路 二十四時間体制フル稼働で、  
葉伊里 でも山路さんはご結婚されてるんですよね？  
山路 あー…そうだったかなあ。(一瞬熟考してみるが) いや。なんにも覚えてないなあ…。  
葉伊里 あー…。

ここでドア1から坂上と岡部が喧嘩をしながらやって来る。  
坂上と岡部は再び入れ替わっていて、冒頭の状態に戻っている。

坂上 だからどいてって言ったじゃん。  
岡部 そんな急に無理だよ、一瞬だったよ、  
坂上 ほんと鈍いよね、あなたのせいだから。  
山路 あれ？ 岡部と坂上さん、  
岡部 ああ聞いてよ山路。こいつが全力でぶつかってきて穴に落ちたんだよ、  
山路 それでまた、バラバラに？  
坂上 もう。せっかくあの爆発のあと、ちゃーんと元通りになったのに！  
岡部 そうだよ。せっかくちゃーんと！  
坂上 あんたがあんなとこにぼさつと立ってたから、(と岡部を何度も叩く)  
山路 ああやめて。(それを止めつつ) どっちが悪いともう、どうでもいいじゃない。そもそもどっちがどっちでもあれなんだから、ね？  
葉伊里 (二人をまじまじと見ている)  
岡部 なに？  
葉伊里 いえ…、  
坂上 あんた罰としてお茶入れてきて。(と箱椅子に座る)  
岡部 なんだよそれ！ 麦茶でもいいね？ (と言いつつドア2へ)  
山路 (葉伊里に) どっちがどっちでもいいんだよ。  
葉伊里 はあ。

坂上 でもいきなりあんなに張り切って大丈夫かなあ。(ドア1を見ながら)  
葉伊里 え？  
坂上 まともに働いたことなんかありませんよ？  
葉伊里 ああ、(ドア1を見て)目の前にある自分のすべきことを、するんだそうです。  
坂上 え？  
葉伊里 無心でそれに、励むんだそうです。  
坂上 ああ。  
葉伊里 あんなに懸命な姿を見るのも初めてだし、きっと先生にはその方がいいですよ…。  
山路 ……。  
葉伊里 ……私、今の先生を応援していいのかな。いつかは書ける時が来るかもしれませんが…、だから今は、今の先生を…、

ここでドア1から知里と郁美が戻ってくる。  
坂上と岡部同様、二人は入れ替わっている。

知里 ただいま。  
郁美 戻ったよ。  
葉伊里 えっ…、  
知里 ああ葉伊里。あんた麦茶持ってきて。  
郁美 あー喉乾いた。ちよつと休憩しよう休憩。  
山路 え…郁美ちゃんと知里ちゃん…、  
知里 なに。  
郁美 どうしたの。  
山路 (坂上に)二人も穴に落ちたの？  
坂上 ああうん。全員落ちてごちゃごちゃ。  
岡部 (ドア2から)はい麦茶ー。  
郁美 お。気が利くじゃん。(と麦茶をとる)  
知里 ありがとう。(と麦茶をとる)  
岡部 あーそれ。  
知里 (人が変わり)しかし何も考えずに働くのはいいもんだねえ。心が洗われるつてもんよ。  
郁美 (人が変わり)ああ。死ぬほど働く分だけ生きてる感じがするってえのは、皮肉なもんだねえ。  
山路 ああ、なんか知らない人も混ざっちゃってるよ、  
葉伊里 先生、  
知里・郁美・坂上・岡部 (「ん？」「なに？」「はい？」など一斉に返事)  
葉伊里 ……え。  
山路 どうしたの岡部、  
知里・郁美・坂上・岡部 (「え？」「なに？」など一斉に返事)  
山路 ……ああなに？なんかこう…、全員が、混じっちゃってるの？  
葉伊里 ……え？どういうことですか？  
山路 だから全員が、  
岡部 いや俺は六十パーセントつくくらいは、岡部かな。(ドア2へ麦茶を取りに戻る)  
坂上 私もそんなくらい、坂上。  
山路 ああそう…。

郁美 (人が変わり) 言ったでしょ。この仕事はいい仕事だつて。  
知里 (人が変わり) いい仕事かどうかは関係ないよ。何でもいい。  
郁美 (人が変わり) どんな風に終わらせようが、人の人生の終着点だよ。  
知里 (人が変わり) こんな風に終わらせたい人は居ないと思うよ。でもしょうがない。  
郁美 (人が変わり) うん。しょうがないんだよ。自分の人生だつてそう。  
知里 (人が変わり) ああ。どんな風に生きたいかなんて濁流に飲まれて選択の余地なく、変わっていくもの…。  
葉伊里 あの…お二人は、何パーセントくらい、お二人なんですか？  
郁美 あー私は十パーセントくらい郁美かな。  
知里 あー私は十パーセントくらい。  
葉伊里 えっ、先生、二パーセントしかないんですか?! あと、九十八パーセントどこ行っちゃったんですか？  
郁美 さあね。  
知里 残りはまあほら、その辺かその辺か、  
郁美 あとはその辺のどこかよ。  
葉伊里 あー……、  
岡部 なんかあつちにこれあつただけど。

ドア2から戻ってきた岡部、郁美の左腕を持っている。

全員 (左腕を見る)  
山路 ああそれ、郁美ちゃんの？  
岡部 え？  
山路 ほら未来に飛んでつたつて言つた、郁美ちゃんの。  
坂上 ああ。  
岡部 左腕か。  
郁美 ああそれもう要らないから。  
知里 捨てちゃつていいんじゃない？  
岡部 でもこれ何か握つてるよ。  
山路 なに。(左腕を見に行く)  
坂上 それより麦茶は？ 取りに戻つたんじゃないの？  
岡部 ああ忘れてた。  
坂上 もー。  
山路 ああこれあれだ。あの日、知里ちゃんが持つてきた封筒。ほら、お母様の、  
葉伊里 ああ死亡診断書。

山路と葉伊里以外、何を考えているか分からない表情になって、間。

葉伊里 (誰も何も言わないので) ……じゃあ預かっておきますね。  
山路 (左腕ごと封筒を葉伊里に投げ渡す)  
坂上 じゃほら、麦茶飲んだら作業再開しよう。  
岡部 (岡部に) ああ早く私の分！。  
郁美 ああちよつと待つて。(とドア2に戻ろうとし)  
岡部 なにあんた、またハマしたの？  
岡部 違うよ、二人が勝手にさ、

知里 あ、これ二人のだったの？（驚き笑う）  
岡部 （笑って山路に）二人がぱつと持ってっちゃうからさ、  
山路 （笑って）ああぱつとね、  
郁美 （笑って）ごめーん、  
坂上 （笑って）もー、  
岡部 （笑って）ほんとにさ、素早くこう、ぱーつと持ってっちゃ（うから）……、（唐突に止まる）  
知里・郁美・坂上（唐突に黙る）……………  
山路 ……え。どうしたの？  
知里・郁美・坂上・岡部（二斉に唐突な号泣）  
山路 わ。びっくりした。

それぞれに号泣し続ける四人。知里として。なのでシクシク泣くのではなく少々暴れて。整理のつかない悲しみや後悔や、得体の知れない感情が、堪えきれずにただ溢れ出してしまう号泣。葉伊里と山路、しばしそれを眺めてから。

葉伊里 （四人にそれぞれに言ってみる）…あ、あの、…先生？…先生？…悲しめたんですか？やつとちゃんと、悲しめたんですか？先生…？  
山路 （知里に）あー知里ちゃん？改めてお悔やみ申し上げます。素敵なお母様だったね。  
葉伊里 いやそれ二パーセントくらいしか先生じゃないんで。  
山路 ああじゃあ、（と誰に声を掛けようか迷う）  
葉伊里 （四人に）あの、とりあえず思いつきり咽び泣いてください。そして晴れ晴れと心を開放して、そしたら創作に意欲を、  
山路 いや知里ちゃんはもう、  
知里 （嗚咽）  
葉伊里 いつかでいいんです。ほんとは書きたいはずなんです。  
山路 いや書こうなんて思わない方がいいんだって、書こうなんてね、ぜんぜん思ってもみ（ないほど）……、（言葉が途絶えたので山路を見る）……………  
山路 ……………。

長めの間。オープニングと同じ音楽イン。山路に照明が灯る。

山路 葉伊里ちゃん…原稿用紙…。  
葉伊里 えっ、  
山路 早く…！

何が起きたか解せぬままに、慌てふためき右往左往する全員。  
知里と郁美が原稿用紙と鉛筆を見つけて山路に渡すと、  
一心不乱に溢れ出すものを書き殴り始める山路。それに対しての無言のリアクション。暗転。

## Film ENDING

タイトル。2025年げんこつ団『800〜1200度のカタルシス』

日本の人口推移グラフ。棒グラフが膨れ上がっている団塊世代、団塊ジュニア世代。その棒が揚々と伸縮する。

(汎愛社ビル。)

ニュース声 「国の支援を受けて経営再編に務めている汎愛社は、行政や地域住民との協議を重ね、この度、新しい火葬場を発表しました。」

「Hottest Station KASO」 C M、煌びやかに始まる。

C M 声 「これからは、人に地球に気持ちに優しい火葬。燃やさない火葬で、お弔い。」

(「仮想火葬」の文字と薄ぼんやりした綺麗なイメージ画像。)

C M 声 「仮想火葬で燃やしたつもり。弔ったつもりでお見送り。

お亡くなりになった大切な方も、燃やされたつもり、弔われたつもりで、人生の幕を下ろせます。」

(炎の優しいイメージ画像。)

C M 声 「生きている気がしなくても、死んでいる気がしなくても、もう大丈夫。

その仮想人生、仮想火葬で、お悔やみ申し上げます。」

(カラフルなスーツが黒く戻っていき、社員たちが手を合わせる。)

C M 声 「お申し込みはとても簡単。したつもりになって頂くだけでOK。それだけで、心を込めて、したつもり。」

汎愛社ビルは黒い煙で煙り、社員たち、手を合わせたまま、町を右往左往する。

一方森では、前の映像のご老人方の物語の人々が右往左往する。

そして前の映像と同じく、老婦人と知里のファンたちが集まって声援を送っている。

その目線の先には、焼け野原の中の火葬場。

急ごしらえの煙突から、黒煙がもくもくと上がっている。

ノーベル文学賞の授賞式には、正装した山路と葉伊里。それを見守る田中と編集者。

そして前に進み出る山路。と思いきや、後ろの編集者にスポットライトが当たる。

男たちが編集者をステージに連れ出していく。

編集者「え、私？ いえ書いてません、書いてませんから、」

(残される山路ら。そして本の表紙。タイトル「いつの間にかに……」。帯には編集者の顔写真。)

再び焼け野原の火葬場。

威勢良く黒煙が上がっている。

周囲には誰も居ない。

やがて陽が暮れ、遠くのビルの灯りが煙る。

一方火葬場の窓は煌々と灯る。

元気に揺れる窓の灯り。煙突から黒煙は上がり続ける。

しばしその風景。そこに紙吹雪が舞う。

紙吹雪のなか、歓声をあげて小四の山路と郁美と岡部と坂上たちが、やたら大勢、集まってくる。声援を送る。その様子から、キャスト紹介。

## 一礼

キャスト紹介終わって舞台上明転。

全員、舞台上に上がって、一礼。

△目次▽

入社	1
Film OPENING	5
開店	6
業務員	9
休憩時間	11
葬儀	16
Film 抗議	18
解雇	19
帰還	23
客	25
執筆	27
Film Once upon a time	29
生家	29
ごきやん	32
汚染	34
配管	37
Film 煙	41
排出	41
無意識	45
排除	47
Film 黒煙	50
燃焼	51
浄化	53
Film ENDING	57
一礼	58